

蜜のあわれ

室生犀星

青空文庫

一、あたいは殺されない

「おじさま、お早うございます。」

「あ、お早う、好いご機嫌らしいね。」

「こんなよいお天気なのに、誰だつて機嫌好くしていなきや悪いわ、おじさまも、さばさばしたお顔でいらつしやる。」

「こんなに朝早くやつて来て、またおねだりかね。どうも、あやしいな。」

「ううん、いや、ちがう。」

「じゃ何だ。言つてご覧。」

「あのね、このあいだね。あの、」

「うん。」

「このあいだね、小説の雑誌巻頭にあたいの絵をおかきになったでしょう。」

「あ、画いたよ、一疋びきいる金魚の絵をかいた。それがどうしたの。」

「あれね、とてもお上手だったわ、眼なんかぴちぴちしていて、とてもね。本物にそっく

りだったわ。」

「頼まれて生れてはじめて絵というものを画いて見たんだよ。本当は絵だか何だか判らないがね。」

「あたいにも、そのうち一枚画いていただきたいわ。」

「絵は画こうとしたって却々、なかなか画けるものではないよ。君から見ると似ているかどうかね。」

「よく似ていたわ、それでね、あれから後に、一週間程してから、雑誌社からお礼のお金が書留で着いたでしょう。」

「これも生れてはじめて画料というものを貰ったのだが、それがどうかしたかね。」

「どれだけいただきになったの。」

「文章が一枚半ついていてね、合わせて一万円貰った。」

「おじさまはそれをわたくしにね、正直に仰おっしゃ有らなかつたわね。幾ら来たってこともね。」

「金魚にお金の話をしたって、どうにもならないじゃないの。」

「だって、あれ、ほんとうは、あたいのお金じゃないこと、あたいをお画きになったんだ

もん、あたいにくださるとばかり、そうおもっていたわ。」

「何だか僕もそんな気がしないでも、なかつたんだけど、」

「でね、おじさま、それについてね。」

「あ、」

「もうお金、だいぶ、おつかいになった？」

「半分つかつたけれど、まだある。」

「何に半分、おつかいになったの。」

「千五百円の玉露を百目買ったし、雉子羽根きじのはたきを一本と、赤玉チーズを一個買った、

……」

「あたいには、とうとう、何も買ってくださらなかったわね。」

「君なんかのことは、まるで、わすれていた。」

「おじさまはずるいわね。あれ、本当をいえばあたいのお金じゃないの。」

「そういうことになるかね。きみを見て画いただけで、それがきみのお金になるものかな。」

「あたい、いつ下さるか、窓の方を毎日のぞいていたのよ、で、ね、あと半分のお金、」

「いただきたいわ。」

「一たいきみは何を買うつもりなの、」

「お友達の金魚をたくさん買ってほしいのよ。」

「あ、そうか、遊び友達がいるんだね、それは気がつかなかった。」

「それから金魚餌という箱入の餌がほしいわ、かがみのついている、美しい箱なのよ。」

「かがみってというのは錫すずの紙の事だろう、あれはかがみになりますかね。」

「水にぬれるとびかびかして、かがみみたいになるわよ、それからね、めだかをたくさん買うの。」

「そんなめだかどうするんだ。」

「めだかの尾がとてもおいしいんですもの。毎日少しずつかじってやるの。」

「尾をかじっては、めだかが可哀そうじゃないか。」

「齧かじってもかじっても、目高の尾というものは、すぐ、生えてくるものよ、だから、可哀そうなことないわ。」

「めだかの尾はたとえば、どんなあじがする。」

「ぬめつとして口の中でも生きていて、ひりひりうごいているわ、とても、おいしいのよ。」

」。

「さんこくだね。」

「おじさま、早くお金出してよ、あたいのお金なのに、出ししづらないでよ。早くさ。」

「じゃ、千円札で五枚、それに剩あまったこまかいのが、百円札と銀貨を合わせて総計五千九百円になる。」

「ええ、これで決算済みよ、それからついでに、外にもっと細かいのもいただきたいわ。」

「銅貨で重くていいか、」

「かまいません、それからおじさま、あたいの歯のお医者様に行きたいんですから、別にその方のお金も頂戴。」

「金魚が歯医者にかかるなんて聞いたこともないが、歯がどう痛いの。」

「このあいだね、慌てて、石を噛かんじやった、がりがりって。」

「あわてるからだよ、たべものは一遍そつと口にさわって見てから、食べるようにするんだね、歯はいたむの。」

「痛いわ、骨にひびくわ。」

「骨にひびくって、骨にとって背骨の骨のことか。」

「お背中のお骨なのよ、おじさま、いま骨の話をしてからおじさまの顔色が、へんに変わって来たわね、それ、どうしたのよ。」

「僕はまだ金魚の骨というものを見たことがないんだ、金魚に背骨があるかないかも昔からわすれていた。人間で金魚の骨を見た人が何人いるかしら、全くたいへんなことを忘れていたものだ。」

「どうしてそんな、あたい達の骨が見たいの。」

「見たいような見たくないような、また、怖いような気もするんだ。よく考えると人間は誰でも、いろいろな骨は見て来たけれど、まだ金魚の骨だけは見た人間は滅多にいない、たとえばきみの優しいからだに骨があるとは、どうにも考えられないことだ。」

「ぐにやぐにやだと仰有るの。」

「あんな針みたいな骨があるなんて、きみの顔を見ていたって、想像もつかないことだからね。」

「死んだら、かいぼうすれば、いいじゃないの。」

「人間は金魚の骨だけは見たくないって、皆さんがそう言っているんだよ。可哀そうだから。」

「あたしもまだ見たことないわ、じゃ、あたひ、そろそろお友達を買いにいつてくるわよ、黒いのや斑ふちなのや、それから、めだかも。」

「行つて来たまえ、自動車に気をつけてね。」

「ええ、お金持になれて、とても今日は嬉しいわ。」

「ハンド・バッグを掏すられないように気をつけておいで。」

「はい、行つてまいります。あ、いいお天気だなあ。」

「水道の水は飲むなよ、げえになるからなあ。」

「はい、すぐかえるから、おじさま、温和おとなしくして待つていらつしやい。」

「よしよし、……」

「おじさまの好きな、いしごろも、買つて来てあげるわ。」

「それから金平糖こんぺいとうもね、ちいちゃいのは頬ほばるのに面倒だから、鬼みたいな大粒のやつ

がいいよ。」

「赤いのや青いのが雑まじっている、あれでいいんでしょう。どのくらいいます。」

「そうね、三百円くらいいるな、子供に頒わけてやることもあるからね。」

「そのお金、先刻いただいた分とは、べつにいただかなきゃ。」

「そうか、ほら、これでいいね。なかなか抜からないね、きみは。」

「だってあたいたい、いろいろ考えてつかうから、おじさまの金米糖のお金は出せないわ。石ごろものは、あたいたいのおみやげにするけど。」

「有難う、たすかった。」

「ふふ、では行ってまいります。」

「道くさをしないで、ちゃんと、お八ツまでにかえつて来るんだよ。」

「はい、」

「うなぎや鯖さばを店さきで見ていると、さかなやさんに捕まって、売られてしまうぜ。」

「はい、はい。」

「ただいま、——あ、怖かった、も、ちよつとで誘拐されるところだった。」

「どうした、真青な顔をしているじゃないか。ふるえてさ、きみらしくもないね。」

「おじさま、お水を一杯ちようだい、こんな怖い事はじめてよ、呼吸もつけないわ。」

「ほら、水だ、ぐつと飲んで気を落ちつけて、何が怖かったかということ話すんだよ。」

「あ、美味おいしい、も少し頂戴。先刻のクロロフィルの入った水よりか、よっぽど、美味し

い。」

「何だクロロフィルなんて。」

「あたいね、おじさま、途中で思い出して丸ビルまで急に行ってみたのよ、お天気は上々だしね。」

「丸ビルまでか、驚いたやつだな、そんな派手な恰好をして。」

「此間からあたい、歯が痛い痛いって言っていたでしょう、だから雨がふるとこまると思つて、七階のバトラー歯科医院まで思い切つて行っちゃつた。」

「彼処はきみたちの行く歯科ではないよ、きみたちは蟹科かにかに行けばたくさんんだ、」

「失礼なおじさまね、蟹科は抜歯ばかりで、歯の技術はてんでだめなのよ、おじさまは何時も歯が悪いくせに、何もごぞんじないんだ。」

「道理で永いお使いだと思つていたんだ。だつてバトラーさんは時間ぎめだから、ふいに行つても療治してもらえない筈じゃないか、幾日の何時という時間を貰わなければならないんだが、」

「そこがあたいの腕のあるところなのよ、ちゃんと療治していただいて、疼うずきもとうに治つちやつた。」

「どうしてそんなウマイことをしたんだ。」

「黒の眼鏡をかけた、英語のぺらぺらのおばちゃんがいらっしやるでしょう。」

「あ、いるいる、きょうもいたかい。」

「だからあたいたい、おばちゃんに歯がいたくて死にそうだと、たのんじやったの、半分泣顔して見せてやったの。」

「そしたら、」

「そしたらセンセイのところにあたいを連れて行って、この子の歯の中に蟹の子がいるそうですね、つまみ出してくださいと頼んでくださいました。センセイはピンセットの先に、とうとう十二足の蟹の卵を捜して、つまみ出して下すったわよ。」

「十二足とはたいへん居たものだな。」

「そして一応抜歯してから、歯は入歯しなければならぬですって。」

「金魚のくせに入歯するなんて変じゃないか。」

「あたいの歯は二千円くらいだけど、こんどのおじさまの歯は金と白金とをまぜてつくるんですって、でなきや、どんなに叮嚀ていねいに作っても、おじさまの痲癩玉は、いつも入歯まで噛みくだいておしまいになりますと、センセイがおわらいになって仰有っていらっした

わ。」

「かかるだろうなあ。」

「そつと聞いたら八万六千円もかかるそうだわ、だから、あたい、ベそを搔いたような顔をして見せて、着いたばかりの原稿料の小切手を置いて来たわ、これ内金でございませす、なんしろおじさまは貧乏ですからと申し上げといたわ。」

「よけいなことは言わないものだ。」

「それからあたい、治療の椅子に腰かけていると、うがい器にどんな仕掛になっているのでしょうか、漂白硝子器に水がくるくる舞いをして、しじゅう清潔なお水が走って流れているんです、それを見ていると先刻からずつと、喉が乾いて尾も頭もからからになつていることに気づいたの、我慢がなくなつて、助手さんの隙を見てね、コップの水を飲んでしまった。飲んでから気がついて青くなっちゃった、あれみな水道の水なんですもの、だから慌てて口をもががしたけれど、もう遅かったわ、げえになりそうになっちゃったんです。」

「だから出しなにあんなに、水道の水は飲むなど、言っておいたじゃないか。」

「あたい、すぐ助手さんと呼んだわ、そしてこのコップの水を飲んだんですけれど、これ、

毒でしようかしらときくと、いいえ、召し上つてもかまいはしませんと仰有ったから、でも、金魚には水道の水は毒でしようと言きなおすと、そうね、金魚にもお毒ということはないでしょう、どうして金魚の事なぞいまどき仰有るんですかと言われたので、あたい、すつかり^{あか}赧くなつて家にたくさん金魚を飼っているものですから、ここにあがつても、いまごろどうしているかと心配でならないんでございますというと、助手さんは何てお優しいお嬢様でしようというの、おじさま、あたいも外に出ると大したお嬢様になって見えるらしいわね、驚いちやつたでしょう。」

「ちつとも驚かないよ、きみが令嬢でなかったら、令嬢らしい者なんて世界に一人もいないよ。」

「おじさまもそう思つてくれるかな、嬉しいナ、ところで助手さんはこのお水にクロロフィルというお薬がはいっているから、金魚の鱗にも効く場合がありますと仰有ったので、あたい、もう少し頂いたわ、クロロフィルつて青い藻みたいに、美しい色をしているお薬なんです。」

「僕の胃腸薬なんかに、クロロフィルが入っていて、散薬だけれど、まるで緑色の薬なんだ。」

「おじさま、こんどそのお薬少し頂かしてね。」

「何にするの。」

「お腹があまり大きくふくれているから、服のむとなおらないかと思うの。」

「その内頒けてあげるよ、併し金魚に効くかどうか、金魚屋さんによく聞いてからにする
といいよ。いまどきの薬の事だから、間違うとたいへんな失敗になるからね。」

「それはよく聞いて頂かないとこまるわね。金魚屋さんて金魚のお医者様みだいだから、
何でも聞くと知っていらつしやるわ。」

「うっかり薬なぞ服まない方がいいよ。」

「それから療治をして控え室に戻ると、大きな西洋人が二人待ち合わせていて、二人とも
睡っていたわ、あたみみたいに赤い顔をしていらつしたものですから、あたいまで睡く
なつちやつた。あたい、このごろね、赤い雑誌の表紙の色を見ただけでも、すぐ睡気がし
て来るのよ。」

「金魚というものは泳ぎながら、みんな何時でも睡っているんだ、口をとじたままでね。」

「それからタクシーに乗つたら、燐マッチ寸一つ貰いました。お釣銭を貰おうとしたら、手を握
られちゃつた。言い分が氣障きざじやないの、お嬢さまのおてては何ておつめたいんですと来

た、あたいたくなくなつて、さよならと言つて降りたわ。」

「さよならなんて言わなくともいいんだよ、手をにぎられたくせに。」

「それからがたいへんなことが始まったのよ。」

「どう、たいへんなことつていうのは。」

「新橋で省線に乗つたでしょう、乗るとすぐあたいの肩に手をかけて、何処に行つて来たんだと、青っぽい服を着た若い男の人がいうの、あたい、こんなちんぴらでしょう、肩にらくに手を置けるんですもの、丸ビルの歯医者さんまで行つたんだと答えたたら、どちらに帰るんだといったから、大森までというと、僕も大森に行くんだから下車したら五分間つきあつてくれというの、あたい、きゆうに怖くなつちやつて、その人のそばを離れて後ろ側の吊り皮にかわつちやつたの、そのとき、つい失礼しますと言つちやつた。」

「ばかだなあ、そんな時に失礼しますなんて言う奴があるかね。それからどうしたの。」

「そしたら次の駅につくと、すぐあたいのそばにまた寄つて来て、たくさん乗客ひとのいる中でも平気でいふんです。歯医者にかかつているなら度たび通わなければならぬから、この次はいつ行くんだ、その日をいつてくれれば、丸ビルで待ち合わせようじゃないかというんです。あたい、もうその人がとても急に怖くなつて了つた。こんな人のことをぐれんた

いというんだなと思ひ、がたがたハンド・バッグを提げている手がふるえて来たわ。」

「一さい口を利かなかつた方がよかつたのだ、きみは一々返事をしたことがおぼこに見え
たんだよ、何処までもきみはこどもくさいからね。」

「それでね、大森に降りたら、白木屋の入口で待つていろというの、あたひ、もう黙つて
返事をしなかつたわ。そしたら、待つか待たないか返事をしろと迫るの、あたひ、もう誰
かにたすけて貰おうかと思つたけど、例の肩の手がはなれないんですもの、だから、こん
どは出口の方に行つてみると、すぐついて来たわ、そのついて来方があんまり早いもんだ
から、乗客は誰もふしぎそうに見る者は一人もいないんです。硝子戸ガラスドに顔をくつつけてい
ると、硝子が曇つちやつて、あたひの心と同じ色になつちやつた。」

「それから男はどうしたい。」

「大森に着く前にもう一ぺん念を押していつたわ、白木屋の前に来なかつたら、ただじゃ
置かないと、省線に張り込んでいるからそう思えと言つたわ、あたひ、下車するとバスの
停留場まで趨はしつたわ、うしろ向くと捕つかまえられると思つてがたがた趨つた。」

「人もあろうに僕の家の者にも、そんな男の手が伸びるなんて、あきれたもんだ。まだ怖
いかね。」

「おじさまにお話したら、ブルブルが取れちゃった、あたい、そんなにうきうきして見えるかしら、それが気になるのよ。」

「きみの少女くさいところを狙ったのだろうが、この狙いは、ねらい損そこねなんだね、きみなんかのように少女くさいのは却々手にのりそうで、いざとなると、ぴよんと跳はね上つてしまつて草臥くたびれもうけさ。」

「あたい、もう丸ビルなんかに行かないわ、もうこりこりよ、けど、おじさまの顔みていると、だんだん怖いのが剥はがれて行くわ。よっぽど、おじさまの名前を言つてご用があつたら、お家に来て頂戴と言おうかと考えたけど、お名前を出すのが悪いと思つてやめといたわ。」

「名前なんか出すのはよしなさい、言わないのが、りこうなんだ。」

「じゃ、あたい、りこうだったわね。」

「自然にふせぐ手をきみは知つていて、それを自分で考えないでやっていたことは、やはり身をまもることを知つていた訳なんだ。」

「おじさま、」

「なに。」

「あたい、お腹がきゆうに空いちやった。お茶一杯飲まないでいたんですもの。」

「では麩ふでもおあがり。」

「あたい、麩ふなんかぐにやぐにやしていや、塩からい、わかさぎの乾からほし干しがつつつきたいんですもの、くたびれちやった。」

「じゃ乾干をおたべ。」

「あ、美味しい、おじさま、井戸水を汲んで来てちようだい、柔らかい水にじつと、少しばら時く、かがみ込んで見たいわ。」

「よしよし、ほらおいしい井戸水だよ。」

「藻も少しいれてよ、古いのは棄てちやって、ごわごわした生きのいいのがいいわ。あ、わすれていた。どう、この齒は立派でしょう。」

「あつてもなくてもいいのに、おしやれだね、きみは、」

「だつて晩にはしくしくと何時までも疼いて、どうにも手がつけられないんですもの、おじさまがそんなに冷淡なこと仰有ると、化けて出るわよ。」

「金魚が化けられるものかい。」

「あたいね、ときどきね、死んだら、も一度化けてもいいからお逢いしたいわ、どんなお

顔をしていらつしやるか見たいんですもの。あたいた達の命つてみじかいでしょう、だから化けられたら、何時か化けて出てみたいと思うわよ。」

「まだまだ死なないよ。夏は永いし秋もゆつくりなもの、冬は怖いけれど。」

「冬は怖いわね、からだの色がうすくなつちまうし、おじさまはお庭に出なくなるし、ねえ、冬になったらお部屋にいられてね。」

「入れて大事にしてやるよ、暖かい日向にね。そしてわかさぎの乾干をやるよ。」

「鏡のついた箱入の餌もね、こまかく叮嚀にかなづちで砕いて、」

「溝川のみじんこ・みみずもさがして歩くよ、きみはあれが好きだから。」

「あ、嬉しい。おじさまは、何時も、しんせつだから好きだわ、弱つちやった、また好きになつちやった、あたいつて誰でもすぐ好きになるんだもん、好きにならないように気をつけていながら、ほんのちよつとの間に好きになるんだもの。此間ね、あたいのお友達が男の人に、一日じゅうお手紙を書いていたわ、人が好きになるということは嬉しいことなかでも、一等嬉しいことでございます。人が人を好きになることほど、うれしいという言葉が突きとめられることがございません、好きという扉を何枚ひらいて行つても、それは好きでつくり上げられている、お家のようなものなんです、と、そのかたの文章がうま

くて、後のほうでしめくりをこんなふうにつけてありました。わたくし旅行先でお菓子を沢山買って、それを旅館に持ってかえって眺めていると、誰が最初にお菓子を作ること考えたのでしょうか、そんな莫迦ぼかみたいなことも書いてございました。」

「きみはいくつになる。」

「あたい、生れて三年経っているの、だから、こんなニカラダが大きいの。」

「人間でいうと二十歳くらいかな、頭なぞがちりしているね。」

「ええ。でも、おじさま、人を好くということは愉しいことでございますという言葉は、とても派手だけれど、本物の美しさでうざうざしているわね。」

「それ以上の言葉は先ず見つかからないね、女の人の言葉としては正直すぎているくらいで、誰でもそうは書けないものがあるね、大胆な表現でしかも極めて普通なところがいいね、どんな人なの。」

「逢つてみたいの。」

「きれいな人かどうか、それが気がかりなのさ。」

「それはそれはきれいな人よ。せいは低いけど。」

「何をしている人なんだ。」

「或る雑誌の編集をしている方、海棠夫人という名前がついている方なの。」

「その手紙を貰った相手は誰。」

「歌舞伎俳優だったのだけれど、いまは、たまにしか出ない名のある俳優なのね、おじさまはきつと名前をいえばお判りでしょうけど、あたい、お友達から口どめされているから、言えないわ。けどね、人を好くということは嬉しいことと、おじさま、言っているのは、とても、たまらないよい言葉ね、人を好くということは、おじさま、言っでごらん遊ばせ。」

「いやだよ、いい年をしてさ。」

「ね、一ぺんこつきりでもいいから言っ見て頂戴、男の人の口からそれを聞いてみたいんだもの、人を好くということは嬉しいことと、おじさま、言っごらん遊ばせ。」

「人を好くということは、……」

「嬉しいことと、息をいれずにひと息に仰有るのよ、おじさま、言っごらん遊ばせ。歯がゆくてじれったいわよ、人を好くということは嬉しいことと、おじさま、言っごらん遊ばせ。」

「人を好くということは、……」

「また吃^{ども}つたわね、ずつと一気につづけるんだと言っているじゃないの。」

「人を好くということは、……」

「すぐ、あとを言いつづけるのよ。判らない方ね。」

「僕にはとてもいえない、かんにんしてくれ。」

「何て年よりのくせにはにかみやだろう、もう言わなくてもいいわよ。」

「慍おこったね、じゃ言うよ、人を好くということは人間の持つ一等すぐれた感情でござい
す。」

「ちがうわね、勝手に言葉を作ってはだめじゃないの、人を好くということは、ほら、早
くさ。」

「人を好くということとは、……」

「何てじれつたいおじさまでしよう、それで小説家だの何のつて可笑おかしいわよ、あたいの
言葉の終らない前に続けるのよ、人を好くということは、なのよ、あら、黙っちゃった。」

「……………」

「言わないの、早くさ。」

「僕はだめだ、きみひとりで其処で何度でも言ってくれ、僕はばかばかしくなるばかりだ
。」

「わかさがないのね。」

「何もないよ、すつからかんだよ、好きでも口にはいえない言葉というものがあるもんだ。」

「あたいね、おじさまみたいなお年よりきらいになっちゃった、幾らいつてもテンポが鈍^{のろ}くて、じれじれして噛みつきたいくらいだわ。」

「金魚に噛みつかれたって痛かないよ、いくらでも噛みつくがいいよ。」

「あんなことを言っている、あたいだって一生懸命に噛みついたら、おじさまの痩せた頬の^かにくなんか、咬^かみとるわよ。」

「怖いね、大きな眼をして。」

「おじさまと遊んでやらなかったら困るでしょう。呼んだって返事しないからね。」

「慍^いるな、あやまる、きみが遊んでくれなかったら、誰と遊んだらいいんだ。」

「じゃ、先刻のことをもう一遍くり返しているのよ、ね、いいこと、人を好くということ
は、……」

「人を好くということは嬉しいものです。」

「おじさま、早く起きて。」

「すぐ起きるよ、石が着いたらしいね。」

「どんだん着いているわよ、表に出て見て驚いちやった。道ばたは通れないくらい積み上げて行つたわ。」

「まだまだ運んでくるよ、そうだな、今日一杯運搬はかかるね。」

「あんなに石をお買いになつて、何をなさるおつもりなの。」

「あれで石の塀をつくるんだよ、石の塀は燃えないからね。」

「此間の火事でお懲りになつたのね、あんどき、あたいくらいある大きい火の粉がどんだん降つて来たわね、あたひ、水の底から見ていると、しゅつと水に落ちた火の粉で、あたひのいるところの水まで熱くなつちやつた。おじさまが来なかつたら水が熱く沸いて了つて、死んでいたかも知れないわ。」

「平つたくなつて水底でふるえていたね、眼だけ大きく開けて、」

「でも呼んだら来てくださつて、たすかつたわ、あたひ、あれからずっと眼が焼けたようにへんになつているのよ。」

「まるで二足ずつ重なつてふくれて見えた程だ、金魚に火事と来たら、それ以上の赤い色ないね、だからあの晩からおじさんは考え続けたのさ。」

「石の塀をおつくりになることでしよう。」

「今までの竹の胡麻穂だと燐寸一本で、火が一面にひろがるからね、まるで家の周囲に燃えやすい焚たきつけ附つけを置いていたようなものなんだ。」

「火事があったら小母さまの足が立たないから、なかなか逃げ出せないし、あたいは小ちやいからお手伝いができないもん、その前にあたいななかあぶられて死んじまっているかも知れないわ、おじさまはどうして小母さまを背負い出すおつもりなの。」

「そこで塀は石につくりかえることに考えついたんだ。おじさんが死んだ後に垣根を結び返す必要もないしね、胡麻穂の垣根つてお金がかかるんだ、息子や娘がいてもみんなお金がないから、垣根をやり代えることも、一年遅れになり五年八年と遅れてボロ家にボロの垣根になつてしまふ、きみはおじさんの大事な友達だけれど、それはただの金魚というぴかぴかのおさかなに過ぎないしね。」

「何の役にも立たないわね、ただ、おじさまの精神的なパトロンみたいにはなっているけど、一緒に寝ることもできないわね。」

「生意気なことは、誰よりも生意気だし、……」

「おじさま、早く起きてよ。」

「いますぐ。」

「おじさま、あれ何て石なの、まぶしいくらい白っぽくて、かさかさして眼に痛い。」

「あれは大谷石という石なの、あれで家のまわりをぐるっと包んで、火事があっても今までのように燃える心配がないだろう。七段くらい積み上げればね。」

「まるでお城みたいになるわね、気がついてよかったわ。」

「どうに気がついていたけれど、おじさんには、そんなお金がいままでになかったのだよ。」

「じゃ、いまあるの。」

「このごろのおじさんはね、やっと石堀くらい作れるようになった。人間は一生かかっていながら、垣根も結えない時が続いた訳だね。」

「おじさまは何でも一生かかってなさる事はしているわね、お庭、やきもの、お仕事、みんなおくて晩成なのね。」

「なまいき言うな。」

「おじさま、いろいろお物入りばかりつづくけれど、あたい、おねがいが一つございますけれど、とうから考えていたんだけれど、こんどはついでに作っていただきたいんです。」

「どういう頼みか、いつてごらん。」

「あたいのお家もついでにつくってほしいの、あの石でまわりを囲うて広びろとしたお池みたいにしていただいて、真中にりゆうとした噴水をしかけて、噴き水がしたしたといちにち、山あいの滝のようにしぶくお家がほしいんです、その中であたい、おじさまに扇の孔雀のように泳いでお見せすることも出来るし、おじさまの好きな大口を開けてうたうことも出来るわ。」

「だんだんぜいたくになつてくるね、作つて上げるよ、そのつもりで黒い石もたくさん買つて置いたんだ。」

「あ、嬉しい、あたい、白い石ばかりかと思つて内々不服だったけれど、黒い石もお買いになつていたの、とても嬉しいわ、だからおじさまは気が利いて好きだというのよ、尾のところにお触りさわになつてもいいわ、くすぐつたくないよう、そよろそよるとお触りになるのよ。おじさま、尾にのめのめのものがあるでしょう、あれをお舐なめになると、あんまりあまくはないけど、とてもおいしいわよ、しごいてお取りになつてもいいわよ。」

「そんなことしたら、きみは泳げなくなるじゃないか。」

「すぐ作れるもの、いくらでも次からのめのめのあぶらが湧いて出てくるわ。あたい、あ

ののめめめの沢山湧いている日が一等うれしい日なのよ、こう言っているまにぐんぐん湧いてくるわ。」

「尾の附根が光り出したね、ちよいと失礼だけれど、お尋ねしますがね、慍おこり出したらいけないよ。」

「なあに、」

「一たい金魚のお臀しりつて何処にあるのかね。」

「あるわよ、附根からちよつと上の方なのよ。」

「ちつとも美しくないじゃないか、すぼつとしてるだけだね。」

「金魚はお腹が派手だから、お臀のかわりになるのよ。」

「そうかい、人間では一等お臀というものが美しいんだよ、お臀に夕栄えがあたつてそれがだんだんに消えてゆく景色なんて、とても世界じゆうをさがして見ても、そんな温和しい不滅の景色はないな、人はそのために人も殺すし自殺もするんだが、全くお臀のうえには、いつだつて生き物は一疋もいないし、草一本だつて生えていない穩かさだからね、僕の友達がね、あのお臀の上で首を縊くりたいというやつがいたが、全く死場所ではああいうつるつるてんの、ゴクラクみたいな処はないね。」

「おじさま、大きな声でそんなこと仰有つてはさかしくなるじやないの、おじさまなぞは、お臀のことなぞ一生見ていても、見ていない振りしていらつしやるものよ、たとえば人がお臀のことを仰有つても、横向いて知らん顔をしていてこそ紳士なのよ。」

「そうはゆかんよ、夕栄えは死ぬまでかがやかしいからね、それがお臀にあたっていたら、言語に絶する美しさだからね。」

「おばかさん、そんなこと平気で仰有るなら、あたい、もう遊んであげないわよ。人間も金魚もいつもきちんとしたことばを口にすべきだわ。お臀って自分で見られないように、後ろ側についていて、人間の中でも一生自分のお臀を見ないで死ぬ人さえあるのに、おじさまだったらその秘密がわからないの、どんな映画だってお臀だけは写さないわよ。」

「このあいだ『殿方ごめんあそばせ』って映画で、ブリジット・バルドーがお臀を見せるところがあつたよ。可愛いお臀だつた、もつとも、はなはだ瞬間的のものではあつたがね。」

「おじさま、いやなところばかり見ていらつしやるのね、あたい、おじさまと遊ぶのがまたいやになつちやつた。」

「人間でも金魚でも果物でも、円いというところが凡て一等美しいんだよ、十くらいの女

の子がおしっこをしているのを外で見かけると、吃驚^{びっくり}していくらおじさまでも顔を反けなくなるね、自分というものを知らないでしていることが、それを全部知っている側から見ると、純潔以前の野蛮な感情で自分自身でどやしつけられるんだ。それが余りに不意に見なければならぬ状態に置かれた自分を責めたい気分だね、こまるね、そんな時はね。」

「あたいね、おじさまがコドモのおしっこしているのを見てさえ、自分のどこかに響かして考えようとするのは、不倅だとおもうわ、誰もそこまで考えをつきこんでいる人いないわよ。」

「そうかな、厭らしい事くらい反省を促してくるものがない筈だが、人間の子供のすることなど、一遍におじさまを遣附^{やっ}けてくるんだ。いわば不倅かも知れないね、この不倅を不倅に感じない人間に、たまたま破廉恥な犯罪がうまれてくるんだね、今までにそのために何十人かの少女が殺されたかわからないね。おじさまだって自分を怖い処に立たせて見て、どれだけの分量で自分に厭らしさがあるかを調べているんだが、何時も恐ろしい結果がヘビのように首をあげてくるね、裁判官という人達はどれだけ他人をしらべていながら、犯罪者から教えられ又救われているか判らないね。だから人間は自分にあたえられたお臀ばかりを見つめくらしていさえすれば、他に苦情がおこらないんだ。たいがい人間はそう

しているんだよ。」

「おじさまは？ おじさまだつてまだお臀が見たいんでしよう。」

「そりや見たいさ。併し問題が夕栄えの景色から外したお臀のことになると、だんだん声が低くなるし大ぴらには言えなくなるね、おじさんの僅かばかり受けた教育がそうさせてくるんだね、人間に書物とか教養があたえられたことは、僕一人にとつても大へんな感謝に値するわけだね。」

「おじさまはそんなに永い間生きていらつして、何一等怖かつたの、一生持てあましたことは何なの。」

「僕自身の性慾のことだね、こいつのためには実に困り抜いた、こいつの付き纏まとうたところでは、月も山の景色もなかつたね、人間の美しさばかりが眼にはいつて来て、それと自分とがつねに無関係だつたことに、いよいよ美しいものと離れることが出来なかつたね、やれるだけはやって見たがだめだつた、何も貰えなかつた、貰つたものは美しいものと無関係であつたということだつた、それがおじさんにたあいのない小説類を書かせたのだ、小説の中でおじさんはたくさんの愛人を持ち、たくさんの人を不倖にもしてみた。」

「おじさま、いい考えがうかんだのよ、おじさんとあたいのことをね、こい人同士にして

見たらどうかしら、可笑しいかしら、誰も見ていないし誰も考えもしないことだもの。」

「そういう場合もあるだろうね、乞食のように生きてゆくひとは、犬や猫と生涯をおくることもあるからな、犬や猫は寝ていると女くさくなつてゆくけれど、金魚とは寝ることが出来ないしキスも出来はしない、ただ、きみの言葉を僕がつくることによってきみを人間なみに扱えるだけだが、まアそれでもいいね、きみと恋仲になつてもいいや、僕には美しすぎた過ぎ者かも知れないけれど、瞳は大きいしお腹だけはデブちゃんだけだね。」

「あたね、おじさまのお腹のうえをちよろちよろ泳いでいってあげるし、あんよのふとももの上にも乗つてあげてもいいわ、お背中からのぼつて髪の中にもぐりこんで、顔にも泳いでいって、おくちのところにしばらくとまつていてもいいのよ、そしたらおじさま、キスが出来るじゃないの、あたね、大きい眼を一杯にひらいて唇をうんとひらくわ、あたねの唇は大きいし、のめのめがあるし、ちからもあるわよ。」

「しまいに過つてきみを呑みこんで了つたらどうなる、それが一大事件だ。」

「そしたらお腹の中をひとまわりして、また上唇のうえにもどつて出てくるわよ、金魚ですもの、ねばり気のあるところでは、あたねのからだはどんなに小さくも伸び縮みすることが出来るし、早く泳ぐこともできるのよ。どう、お腹のうえを泳いであげたら、おじさ

まはくすぐ撥くすぐつたくなり嬉しくなるでしょう。」

「そうね面白いだろうね、けど、撥くすぐつたくてかなわないだろう、ぴちぴち跳ねられたら？」

「そつとして上げるわ、慎重に。」

「なにぶん、よろしく頼むよ。」

「では恋人になるわね。」

「何て呼んだらいいんだ、名前からつけなきや。」

「赤い井のなかの赤子、赤井赤子つてのはどう。」

「いいね、あか子、赤井赤子というのはちよつと変っていて、呼びいいね。ではそう呼ぶことにしよう。」

「それからね、いろいろ物を買っていただかなくちや、あたゐ、何一つ持っていないんですもの、ネックレス頸飾ネックレスだの、時計だの、時計はきん色をしたぴかぴかしたのね、それから指環もいるけど靴だの洋服だの、……」

「きみがそんな物を着たりは嵌めたりしたら、お化けみたいじゃないか。」

「お化けでも何でもいいわよ、買っていただけなの。」

「買うよ、おじさんの買物を控えめにすれば、何でも買える。」

「も一つ肝腎なことは毎月小遣どれくらい貰えるの、それを決めてかからなきゃ、それが一等肝腎なことだと思わ。」

「そうだな、千円もあればいいんじゃないか。」

「千円ぼつちで何か買えるとお思いになるの、どんなにすくなくとも五万円ただかなくちゃ暮せないわよ。」

「五万円という金はおじさんの小説一つ書いたお金の高だよ、それだけ毎月きみに上げたらおじさんこそ、どう暮しているか判らない、まあせいぜい一万円くらいだよ、それで勘なかつたら恋人はやめだ。」

「こまるわ、一万円じゃ。じゃね、クリイムだのクチベニのお金は時々べつの雑費として出していただけます？」

「それは随時に出すことにするよ、現金では一万円以上はとも出せないよ、金魚のくせに金取ってどうするつもりなの。」

「じゃ一万円でいいわ、ふふ、一万円の恋人ね、あたいはたらくことにするわ、縁日の金魚だらい盤に出てゆくわ。」

「そしてどうする。」

「買って行った人の家から、晩方にはおじさまの家に直ぐ逃げてもどるわ、あたいは一疋で三百円が懸値かけねのないおねだんだから、逃げ出してはまた別の金魚屋に売られて、またおじさまの処に戻って来るわ。」

「見附かつたらどうする、殺されるぜ。」

「人間けちって吝だから三百円もする金魚は決して殺しはしないわよ、それに、皆さんは金魚だけはどんな残酷屋さんでも、殺すもんですか、金魚は生涯可愛がられることしか、皆さんから貰ってないもの、金魚を見て怒る人もまた憎む人もいないわ、金魚は愛されているだけなのよ、おじさまも、それだけは頭に入れて置いてあたいをいじめたり、怒らせたりしちゃだめよ。」

「判った、きみはえらい金魚だ、娼婦であるが心理学者でもある金魚だ。」

「昔、支那の皇帝がお池で金魚の衣裳を着けた女達を泳がせたことがあるの、それ以来金魚は擬人法をならうことが出来たし、水の中でうんこをすることも覚えたの。」

「じゃ何かい、そのお池で誰かがうんこをもらした女がいたの。」

「そうらしいわ、金魚唐史に出ているわ、支那から泳いで来たというのはでたらめだわね。きつと商人達がもうけるためにお船で持つて来たのよ、おじさま、もう、そろそろ寝まし

ようよ、今夜はあたいの初夜だから大事にして頂戴。」

「大事にしてあげるよ、おじさんも人間の女たちがもう相手にしてくれないので、とうとう金魚と寝ることになったが、おもえばハカナイ世の中に変ったものだ、トシヲトルということは謙遜な^{おびただ}こと夥しいね、ここへおいで、髪をといてあげよう。」

「これは美しい毛布ね。」

「タータン・チェックでイギリスの兵隊さんのスカートなんだよ、きみに持って来いの模様だね。」

「これ頂戴、」

「何にするの、厚ぼつたくて着られはしないじゃないか。」

「大丈夫、スカートにいたします、まあ、なぜお笑いになるの。」

「だってきみがスカートをはいたら、どうなる、」

「見ていらつしやい、ちゃんと作ってお見せするから。どう、あたい、つめたいからだをしているでしょう。ほら、ここがお腹なのよ。」

「お、冷たい。」

「むかしね、おじさま、」

「また秦の始皇が大きな鯉と寝て風邪をひいたという話でしょう、それなら何遍も聴いたよ、それでないや唐の姫達が一疋ずつ金魚を口にふくんで、皇帝の穩座おんざを飾ったという話だろう、うまいことを考えついたものだね。金魚を啜くわえて伺候するなんてね。」

「むかしむかしね、おじさま。」

「ふむ。」

「あたい達の眼があんまり動かないので、瞬きをして表情を多様にするための眼のお医者様がいたのよ、いまの眼を大きくする病院みたいなどころなのよ、その眼医者がたいへん流行はやつちやつて、みんな、眼の治療に行つたけれど、後でよく気がつくと、眼ん玉が引つくり返つただけで依然として、金魚の眼はまたたくことが出来ないで、じつとしているじゃないの。」

「金魚の眼はいやに動かない眼だな。」

「だから紅鱗こうりん瞳とみと競きい、瞳どう孔人こうひとこれを見ずという悲しい詩があるくらいだわ、おじさま、そんなに尾つぽをいじくつちやだめ、いたいわよ、尾つぽはね、根元のほうから先の方に向けて、そつと撫でおろすようにしないと、弱い扇だからすぐ裂けるわよ、そう、そんなふうには水のさわるように撫でるの、なんともいえない触りぐあいでしょう、世界じゆ

うにこんなゆめみたいなものないでしょう。」

「先ず絶無とっていいね、人間なら舌というところだ。」

「あとでお腹の掃除もしてあげるわ。」

「何処に行くの、じつとしていたまえ、」

「背中のようにすを見てから、胸のうえに登つてと、まるでお山が続いているみたいね。人間一人をつかまえてしらべて見ると、とても、大きくじらみたいものだわね。」

「寝たまえ、おしゃべりはいい加減にして寝たまえ。」

「ええ。おじさまは明日は何をなさるおつもり。」

「明日はね、石の塀をつくるんだ、職人衆の来る前に起きて、指図をしたり形をきめなければならぬんで忙しいんだよ。」

「あたい、どうしていたらいいの。」

「あたいは一人で遊んでいたらいいんだ。目高を呑みこんだり吐き出ししたりしていればいいよ。」

「おじさまは遊んでくれないの、つまんないな。」

「きみと遊んでばかりいられないよ、そのほかに仕事もあるんだ。」

「また小説でしょう、あたいのことなぞ書いちやいやよ、書く人と書かれる人のちがいは、大変なちがいだから書かないでよ、」

「ところがね、おじさんは此間から金魚はなぜあんなみじかい生涯を生きなければならぬいかと、そんな事をしじゆう、考え続けているんだ、たとえば目高は人間にしたしまないが、金魚はあしおとがすると、すぐ集まってくる、そこに目高と金魚の遠近が人類とむすびついて来る。」

「つまらない事を仰有るわね、それより、此方を向いて頂戴、ことわざに曰く作家老いて悲境に陥るといふことがあるが、おじさまもその部類ね、かくごはしていた、なんて仰有るけど、こうみるとすでにふつうの人の百歳の年齢に足をふみいれているわね、足はがさがさして鹿の足のごとく、お背中はやつと張っているだけね、遠い遠い百歳がもうやって来ているわね、七十歳でもう百歳の人、あるだけを書き、あるだけを叩き売った心のぼろを提げている踵のヤブれた人、そんなひとがさ、あたいのような若いのと一緒に寝るのは、百歳にして恋を得たと矜ほこりがましく仰有っても、いくらいよ、あたいはもう金魚じゃないわね、一枚の渋紙同様のおじさまだつて生きていらつしやるんだもの、一たい何処にいのちがあるのよ、いのちの在るところを教えていただきたいわ。」

「おじさんはおじさんを考えてみても、いのちを知るのに理窟を感じてだめだが、金魚を見てみると却^{かえ}つていのちの状態が判る。ひねり潰せばわけもない命のあわれさを覚えるが、おじさん自身のいのちをさぐる時には、大論文を書かなければならない面倒さがある。」

「論文なんていやね。そしてあたいが魅をたべているときに、いのちを感じると仰有りたいんでしょう。あたいの生きていることは、おじさまを困らせている時ばかりだ。」

「スーツを買い靴を買いという時か。」

「そのほかにもある。追々わかつてくるわ。しまいにおじさまはあたいを煩さがって、何処かに捨てに行きやしないかと思うことがあるわ。でなきや殺してしまうかの二つだわ。」

「きみが木々の間を泳ぎまわりおじさんに躓^ついているあいだ、おじさんはきみを大事にしているんだ、きみは何処にでも匿^{かく}すことが出来るし邪魔にはならない。」

「おじさま、何時あたいが木の間に泳いでいるのをごらんになったの、」

「明るい日の中の梢に何だろうと見ていると、きみの泳いでいるすがたが見えていた。池を見るときみはいなかったのだ。きみは恐ろしい金魚だ、木の間をつたい、木の下において行ったが、いまでも本当の事だとはおもえないくらいだ。」

「あたいだってあれは本当のことに思えないわ。おじさま、仰向いて寝てよ、あたい、お

腹のうえだと、とてもお話しよいのよ。」

「おじさんの方からは、顔がよく見えないじゃないか。」

「これでいい？」

「あ、それでいい、だいぶ、からだが温まって来たね、お腹がふにやふにやしてきたじゃないか。」

「お腹が空いてきたのよ、お水と餌とを持って来て頂戴、なんか大きな鉢のようなものに水を一杯入れてきてね、時どき、ざんぷりとはいらないと呼吸ぐるしいわ、ついでに揚タオルもね、早くね。」

「はい、はい。」

「おじさまはしんせつね、美味しいお水ね、冷蔵庫から取り出して来たのでしよう、おう冷たい、あ、色が変わるくらい冷たいわね。」

「はい、干鱈^{ひだら}。」

「こまかく刻んでくださつたわ、塩^{しよつ}はくていい気持、おじさま、して。」

「キスカい。」

「あたいは冷たいけれど、のめつとしていいでしょう、何の匂いがするか知っていらっ

しやる。空と水の匂いよ、おじさま、もう一遍して。」

「君の口も人間の口も、その大きさからは大したたちがいはないね、こりこりしていて妙なキスだね。」

「だからおじさまも口を小さくすぼめてするのよ、そう、じつとしていてね、それでいいわ、ではお寝みなさいまし。」

二、おばさま達

「石の上に子供達が集まって遊んでいるわよ、あれ、崩れたら、下敷きになっちゃうわ。」

「そりや困るね、そんなに高く積み上げて行ったのか。」

「上へ上へと積み上げたもんだから、一等上の方から、地面を見ていると、眩暈めまいがして来るくらい高いわ。」

「きみ行つて、子供を下ろしてしまえ。」

「ええ、そう言ってくるわ。あの、皆さん、その石の上で遊んじゃだめ、危いわよ、崩れて下になったら、死んじまう、お利口さんだから別の処に行つて遊んで頂戴、ほら、ね、

きゆうには降りられないでしょう、さあ、あたいが抱っこして上げるから、彼方に行つて
。」

「皆、行つたか。」

「行つたわ、あたいの顔を不思議そうに見ていて、あの人誰だい、あんな人、あの家で見
たことがないじゃないか、と言つていたわ。」

「きみは派手な顔をしているからな。」

「おじさま、また来たわよ、怖いお隣の地主さんが来たわ、きつと、離れがお隣の地所に
屋根をつん出しているのを、今度は何とかしなきゃね。」

「離れを一尺くらい、がりがり削り取るんだね。」

「こんどは石の塀だから、ふつうの場合とちがうわよ、どうなさる。」

「大工を呼んで境界ぎりぎりに削り取るんだ。でないと裁判沙汰になるし、法律では幅一
尺の十五間けんぶん分の、つまりその三十年間の地代も払わなければならなくなる、やはり離れ
をこわ毀すことになるんだ。」

「可哀そうなおじさまね、でも、やむをえないわね。」

「やむをえないね。併し片側の出来栄は、なかなかいいじゃないか。やつと今度こそ生

涯の垣根が出来た訳だ。」

「おじさま、此処へいらつしやい、石塀の上に腰かけていると、ずっと町の彼方まで見えて来て、いい気持だわよ。」

「高きに登るということは、いいね。石塀を作つて置いて宜かった。」

「あたね、おじさまがおはなれをお毀しになるか、そのまま突っぱねるかどうかと、じつと見ていたわ。」

「この前、そうだな五年くらい前だ、お隣のおじさんが来てね、あなたも名誉のある方だから、いますぐとは申しませんが、塀を作りかえるような事があつたら、地所は還してくださいと、そう言われていたんだ、地所と云つたつて、僅か一尺に足りない軒先だけがお隣に飛び出していたんだがね、そこでお隣では、後日のために一枚の書附をくれといつてね、おじさんは書附を書いて渡して置いたんだよ。」

「どう、お書きになつた。」

「必要の時期にははなれを取毀しても、地所の出つ張りを引っこめますと書いたね。」

「その時期が来て了つたのね、今度は石の塀だから永い間壊れないから、軒先を引っこめたのね、だから、おはなれのお床の間がまがつつちやつた。」

「だから素直にこわして雨落ちも、お隣に落ちないようにしたんだ。」

「地所というものは、憂鬱な境をもっているものね。」

「人間はむかしから国と国の間でも、そのために戦争もして来たんだし、個人の間でも、がみがみ咬み合ったもんだよ、だから、おじさんは地所というものは、一坪も持っていない、此の家も借地だし軽井沢の地所も借りている。」

「軽井沢に一度連れて行ってよ、汽車の中でも、温和しくしていますから連れてって。」

「土瓶に水をいれて、きみをつれて行くか。」

「駅々で水をかえてくださらなきやだめ。水が列車でゆれどおしだから、あたい、ふらふらになっちゃって、とても草くたび臥れてしまうのよ。」

「山の水はきみにはどうか。」

「山の水にひたると、あたいのからだは燃え上って来るし、瞳は一そうキラキラになるわ。あたい、おじさまと毎日山登りをするわ。ね、考えても愉しいじゃないの。魚は木を越え山に登ると、誰かもいつたじやない？ あたい、せいぜい美しい眼をして見せ、おじさまをとろりとさせてあげるわ。」

「きみは人間に化けられないか。」

「毎日化けているじゃないの、これより化けようがないじゃないの。」

「もつと美しい女になって、見せてほしいんだ。」

「おじさまはどうして、そんなに年じゆう女おんなって、女がお好きなの。」

「女のきらいな男なんてものは、世界に一人もいはしないよ、女がきらいだという男に会ったことがない。」

「だっておじさまのような、お年になっても、まだ、そんなに女が好きだなんていうのは、少し異常じゃないかしら。」

「人間は七十になっても、生きているあいだ、性慾も、感覚も豊富にあるもんなんだよ、それを正直に言い現わすか、匿しているかの違いがあるだけだ、もつとも、性器というものはつかわないと、しまいには、つかい物にならない悲劇に Ause すれば、だから生きたかったら、つかわなければならぬんだ、何よりそれが恐ろしいんだ、おじさんもね、七十くらいのジジイを少年の時分に見ていて、あんな奴、もう半分くたばってやがると、蹶け飛ばしてやりたいような気になって見ていたがね、それがさ、七十になってみると人間のみずみずしさに至っては、まるで驚いて自分を見直すくらいになっているんだ。」

「性器なんていやなこと、平気でおっしゃるわね。そんなことは、口になさらない方が立

派なのよ。」

「心臓も性器もおなじくらい大事なんだ。なにも羞かしいことなんかないさ、そりや、おじさんだって性器というものには、こいつが失くなってしまうえば、どんなに爽やかになるかも知れないと、ひそかに考えたこともあつたけれどね、やはりあつた方がいいし、あることは、どこかで何事かが行える望みがあるというもんだ。」

「そんなこと大声でおっしゃっては、あたいがあか靨あかくなつて了うじゃないの。人間のたしなみの中でも、一等謹んでそつとして置くべきことなのよ、口にすべきことじゃないわ。」

「そりやそつとして置きたいんだよ、けれども一遍くらいは七十の人間だって百歳の人間だって、生きて脈打っていることを知りたいんだよ。」

「じゃ、おじさまはわかい人と、まだ寝てみたいの、そういう機会があつたら何でもなさいますか？」

「するさ。」

「あきれた。」

「だからきみとつきあっているじゃないか。おじさんが牧師や教員のまねをしていたら、生きることには損をする。そりや綺麗に生きるためにも、したいことはするんだ。きみはい

ま、おじさんのふとももの上に乗っているでしょう、そして時々そつと横になって光ったお腹を見せびらかしているだろう、それでいて自分で羞かしいと思っただことがないの。」

「ちつとも羞かしいことなんか、ないわよ、あたい、おじさまが親切にしてくださるから、甘えられるだけ甘えてみたいのよ、元日の朝の牛乳のように、甘いのをあじわっていたいの。」

「それ見たまえ、ちんぴらのきみだつて、自分のつくつたところに、とろけようとしてい
るんじゃないか。何も解りもしないきみが、こすり附けたり噛みついたりしていても、そ
れで些ちつとも羞かしい気がしないのは、きみが楽らくなことをらくに愉たのんでいるからなんだ
。」

「あら、そうなるか知ら。だったら、羞かしくなるわね。」

「亢奮こうふんしてからだじゆうぴかぴかじゃないか。これでおじさんの先刻から言ったこと解つ
ただろう。」

「解つたわ。ごめんね、なんだかあたい、ふだん考えていること匿かくしていたのね。」

「実際に行うていながらね。」

「つじつまが合わなかつたわね。」

「つまり年をとると、本物だけになつて生きかえつているところがあるんだよ。」

「だから若いひとがいいの。」

「こちらが少年になつていいるから、結局、若いのがよくなる。」

「けどね、おじいちゃんが若い人を好くというのは、ちよつと、いやあね。見苦しいわ。」

「ちつとも醜悪じゃない、当り前のことなんだ。」

「だから、あたいのような若いんじゃない、だめだというの。」

「きみより若いひとはいないね、たつた三歳だからね。三歳のきみが七十歳のおじさんと、腕をくんで山登りするなんて、世界に二つとない珍風景だね。きみはきまりの悪い思いをしないか。」

「あたいは本当は、おさかなでしよう。だからちつとも羞かしくないわ。おじさまは他の方かたにおあいになつたら、きつとお困りでしょうに。」

「なるべく隠れて歩きたいな、発見みけられたつて構いはしないけど、おじさんの生きる月日があとに詰つてたくさんないんだもの、だから世間なんて構つていられないんだ。嗤わらおうとする奴に嗤つて貰い、許してくれる者には許してもらうだけなんだよ。きみはきらいかも知れないけど、その点で実に凶々しく大手を振つて歩けるんだよ、世間で手を叩いて

莫迦扱ぼかいにしたって平気なもんだ。生きるのに何を皆さんに遠慮する必要があるもんか。」
 「おじさまはとても凶太いことばかり、はつとすることをぬけぬけと仰有る。そうかと思
 うと、あたいのお尻を拭いてくださるし……」

「だつてきみのうんこは半分出て、半分お尻に食つ附いていて、何時も苦しそうで見てい
 られないから、拭いてやるんだよ、どう、らくになつただろう。」

「ええ、ありがとう、あたね、何時でも、ひけつする癖があるのよ。」

「美人というものは、大概、ひけつするものらしいんだよ、固くてね。」

「あら、じゃ、美人でなかつたら、ひけつしないこと。」

「しないね、美人はうんこまで美人だからね。」

「では、どんな、うんこするの。」

「固いかんかんのそれは球みたいで、決してくずれてなんかいない奴だ。」

「くずれていては美しくないわね、何だかわかつて来たわよ。」

「きめの織こまかいひとはね、胃ぶくろでも内臓の中でも、何でも彼でも、きめが同じように
 こまかいんだよ、うんこも従つてそうなるんだ。」

「おじさま、うかがいますが、あたね美人なの、どうなの教えて。」

「きみは美人だとも、きみのまわりに何時も十人くらいの子供が、うやうやしてきみを飽きることも知らないで眺めている。」

「どの子もお金を持っていないで、眺めているだけね。可哀想ね、子供はお金を持ってはいけないの。」

「子供はほかの事にお金をみんな使ってしまったて、最後に金魚屋の前を通過して、失敗しまった、あんなにお金はつかうんじやなかったと、悲しげに金魚を眺めているだけなんだよ。何時も何時もそうなんだよ。」

「わかったわ、で、みんな悲観して茫然と立っているだけなのね。金魚は買えないし、見れば見るほど美しい、だから、先刻から一時間も立って眺めている、……おじさま、金魚を一尾ずつでもいいから、子供達に買ってあげてよ。」

「うむ、ほら、お金だ、きみが買ってみんなに頒けてやるがいい。」

「ありがとう。子供の顔ったら悲しそうで見ていられないわ。あら、あの金魚屋さんは、凝じっ乎と先刻からふしぎそうにあたいの顔を見ている、……」

「どこかに見おぼえがあるらしいんだな。」

「あたいも彼の顔だけはわすれることが出来ないわ。毎日彼の顔ばかり見ている、そだつ

て来たんだもん、いまあたいたい、おじさまの頬つぺを引っぱたいても、慍らないですよ。」

「どうしてそんな事をする。」

「あたいがえらくなつた証拠を、金魚屋さんの眼に見せてやるのよ、きつと驚くでしょう。」

「じゃ、引っぱたいてもいいよ。」

「ごめんよ、びつしりとゆくわよ、痛くないこと。」

「ちつとも。」

「金魚屋さんたら慍れちやつて、此方をきよとんとした眼で見て、口を開けたまんま言葉も出ないふうね。」

「他の者には女に見え、金魚屋には金魚に見えるきみが不思議なんだろう。」

「その金魚がお金を持つてね、金魚を買いに行くことは嬉しいお話じゃないの、ほらね、子供達がみんな此方を向いて、金魚をすくい出し始めたじゃないの。坊や、大きいのを上げるわよ、おばちゃんがお金払うから、心配しないで、どんどん、すくい上げていいのよ。」

「おばちゃん、十人もいるんだぜ。」

「何十人いたつていいわよ、おばちゃんは、きょうは、お金はうんと持っているんだ。」

「そんなら、証拠にお金を見せてよ、おばちゃん。」

「これだけみんな買ってあげるわ。あるだけ盃たらひの金魚をすくい出して持つてお帰りになるがいいわ。ほしけりや金魚屋のおじいちゃんも売つてもいいわよ、ふふ、……こんにちはお久しく、おじいちやま。」

「おう、三歳さいつ子、あれがおめえのだんなかい、うまくやったな、よぼよぼは直ぐかたがつくから、しこたま貰つとくがいいぜ。」

「何言つてんの、だんなじゃなくてセンセイだわ、締め殺したつて死ぬ方じゃないわよ、心臓には鉄屑が一杯つまつていらつしやるから、あんたなんぞの手に負えはしない。」

「それじゃ機関車じゃねえか。」

「旧式の機関車なもんだから、森林でも山でも、咬み倒して走つてゆくわよ。」

「おめえは一たい、あの方の何なんなんだ、わかつた、おめかけさんだな。」

「あたい、あの方のこれなのよ、お妻さんなんかじやないわ、も一遍、頬ほっぺ叩いて見せてあげるわ、ね、ちつとも、お愠りにならないでしょう、あたいの言うこと何だつて聞いてくれるのよ、いまにお池と魚洞うろをつくつてくださるお約束なの、おじいちやま、お金がほ

しかつたら、こんど来る時にうんと金魚持っていらつしやい、お池に放すんだから、どれだけ居たって足りることはないわ。」

「おめえは偉い金魚に、何時の間に早変りしたんだ。」

「対次第でどんなにでも、かわれば変ることが出来るものよ、多少バカでもね。」

「いつでも鏡台にむかつてべそ搔いていたからな、お客はつかないしからだは弱いしね。

だが、三歳つ子、こんだ当てたな、あのじじイ、したたかな顔をしているが、商売は一体何だ。」

「知らない。」

「知らないことあるもんか、こそつとおらにだけ言えよ。」

「知らないつたら知らないわよ、知っていたって金魚屋さんなんかに、あの人のこと言うもんですか。」

「言えない商売ならどろぼうか、騙^{かた}りの類だろう、だが、どろぼうが石堀の中に住むことは、ねえからな。ひよつとすると図面引きかな。なんとか言ってくれよ。」

「知らない、あたい、あの方のこと言わないってお約束がしてあんだから、いくら、おじいちゃまだって言えないわ、誰にだつていうもんか。おうい、おじさま、そろそろお出掛

けのお時間よ、早くお髭ひげを剃ってお湯にはいつて、ご用意なさらなければ、時間に遅れたら大変なことになるわよ。」

「憂鬱だ、講演というものはもう三日前から、食欲がなくなつて了うし、胸は酸すつぱくなるし、元気までなくなる、……」

「だってこの間からお書きになつていた原稿を程よく、時間をお置きになつてろうどくなさればいいのよ、さあ、お髭をお剃りになつて。」

「きみは来てはだめだよ。」

「だってあたいがいなくなつたら、おじさまはびくびくして講演出来ないじゃないの。あたゐ、うしろに隠かくれていて、おしりを抓つかつておあげするわ。」

「だからお節せつかい介はやめてくれと言うんだ。一人なら吃りながらも喋しゃべれるが、きみがいと気が散るんだ、頼む、きようは来ないでくれ。」

「なんて悲壮なお顔なさるわね、じゃ、行かないわよ。」

「慍いんるなよ、おじさんは一人だと、さばさばして何でもお喋りが出来るんだ。」

「じゃ、まいりません、あんしんして行っていらつしやい。階段はすべるから気をつけてね。それから、パイプをわすれないで持つて帰つていらつしやい。」

「じゃ行つて来る。」

「卓テエフルの上にコップと水を頼んで置かなくちやね。お話に詰つたら、おひやをあがるがいいわ。たすかるわよ。」

「金魚じゃあるまいし、水なんかいらさないよ、水ばかり飲んで降壇したらどうなるんだ。水を飲みに演壇に立つようなものだ。」

「それなら、なお拍手喝采だわ、コップの水を飲んで、それきりで降壇するエンゼツもあつていいじゃないの。」

「あ、困つた。」

「くるまが来たわよ、あら、美しい婦人記者がお迎えなのよ。ぴちぴちしていて、くるまと同じ色の靴はいていらつしやる。」

「きようは美人も眼にはいらぬ。」

「なんて顔なさるの、ほら、お帽子よ。」

「じゃ、行つて来る、来ないでくれよ。」

「じゃ、行つてらつしやい。おじさま、顔、もう一遍見せて、それでいいわ、もう元氣が出て来て、かくごをしたお顔色になつてゐるわ。」

「あの、お見受けしたところ、どこか、おからだがお悪いんじゃないやございませんか。」

「は、少し何だかきゆうに。」

「たいへんお呼吸が苦しそうですが、お水でも、おあがりになりましたら？」

「水なんかあなた、会場ここではとても。」

「お水ならあたいたい、いいえ、わたくし、持っていますから、水筒の口からじかにおあがりくださいまし、さあ、どうぞ。」

「まあ、これは、恐れいります。」

「どうぞ、ぐつと、……」

「は、」

「もつと召しあがって、あ、おらくになつて、お顔の色が出て来ましたわ。ほらね、呼吸づかいがちゃんと、平均して来たじやございませんか。」

「は、どきどきするのが停つてまいりました。何とも、お礼のもうしようもございません。」

「もう、ちよつと召しあがれ。」

「あ、おいしい。もう、おさすり下さらなくても、結構でございます。どうぞ、お手をおろしてくださいまし。」

「お呼吸の苦しい間、お背中が強張こわばっていましたけれど、あ、そう、わたくしもお水いただいて置きましよう。お廊下に出てお憩やすみになったら？ 上山さんの講演も終わりましたし

」。

「では、ごめいわくついでに、ご一緒にしていただきます。」

「このクツションには、よりかかりがあつてよございます。」

「もうすっかり楽になりました。わたくし心臓が悪いものですから、会場に参つてからも気をつけていたんですけれど、ふいに、前の方が暗くなつてしまいました。」

「あなたが俯向うつむいていらつしつても、お呼吸のはあはあいうのが聴えて来るんですもの、驚いちゃつてどうしようかと、ひとりで、うろたえてしまつたんです。」

「あの、へんなことお聴きするようですけれど、どうしてお水をあんなに沢山お持ちに、なつていらつしつたんでしょうか。」

「ええ、少し訳がございまして、……」

「あら、ごめんあそばせ、失礼なこともうし上げまして、あなたがそんなにお若いのにご

要心深いと、ついそう思ったものですから。」

「わたくしは何時もお水がほしい性分なものですから、水筒をはなしたことが、まだ一度もございませぬ。」

「お井戸の水でございますね。」

「よくござんじでいらつしやいますこと。それより今日は誰方のご講演をお聴きにいらつしたんですか、まだ、ご講演がある筈なんです。」

「わたくし上山さんのご講演をお聴きして、もう帰ろうと支度しかかかっていて、つい、めまいがしたものですから。」

「上山さんをごぞんじでいらつしやいますか。」

「上山さんに書き物を見ていただいたことがあるんです。十五年も前のことですが、滅多めつたにご講演なぞなされない方なものですから、お目にかかりたくても機会がなかったのですが、新聞でお名前を見て今日は早くから参っていたのが、からだに障さわったのかも知れませぬ。」

「まあ、おじさまと十五年も前に、お会いになつていらつしたんですか。」

「おじさまって仰有ると、それは上山さんのことですか、水筒に上山と書いてあつたもの

ですから、はっとしたのですが、上山さんのご親戚の方なんですか。」

「ええ、親戚の、そうね、孫のような者なんですけれど、お身のまわりの事も見ておあげしている者です、どう言ったら巧くわたくしの立場がいい現わせるか、いいにくいんですけど。」

「でも、おじさまってお呼びになっぺいらっしやいますから、きつと、同じお家にいらっしやるんでしよう。」

「え、きょうのご講演は聴きに來ちやいけないって、厳しく申しつけられていたんですけれど、家にいるのがたまなくて参りましたの、あたいがいなくては、上山は何も出来なぃんですもの。」

「まあ、あたいつてお可愛らしいことを仰有る。」

「もう、言っちゃったから言うけど、あたぃ、おじさまが失言したりなんかしないかと、びくびくして聴いていました。そしたら巧くお喋りになれてほつとしちゃったの。そしてらこんどは、あなたのおからだが悪くなつて、それが会場総立ちになつたらおじさまが可哀そうだから、お水をさし上げたのよ、あたぃ、あんなに慌てたことがないんですもの。」

「あなたはお幾つにおなりなの。」

「あたい、幾つかしら、幾つだと言ったら適当なのかわかんないけれど、十七くらいになるでしようか。」

「それで上山さんはあなたをお可愛がりになっていらっしやるんですか、たとえば、おみやげとか、お買物とか、ご飯も、ご一しよにあがっていらっしやいますか。」

「いいえ、ご飯は別ですけど、あたいの食べる物は、ふつうの人とはちがいますもの。」
「どういうふうに、お違いになるんですか。」

「そんな事ちよつと簡単にはいえないわ、お食事はちがっていますけれど、夜もご一しよに寝ることもあるし、……」

「まあ、ご一緒にお寝みになるんですか、そんなことをあなたは平気でおっしやいますけれど、ご一緒ということは、一つのお床で上山さんとお寝みになることなのよ、勘違いをしていらっしやるんじゃない、……」

「いいえ、一つのお床なのよ、あたい、おじさまのむねや、お背中の上に乗って遊ぶこともあるし、……」

「遊ぶんですって。」

「ええ、撥ったり飛んだり跳ねたりするわ、おじさまは眼をつぶっていらっしやいますだ

けだけど、あたい、そのお眼めをむりに開けたり、それからお眼めの上からだを据えていたりしていますと、おじさまは、とても、眼めが冷えてお喜びになります。」

「あら、そんな事までおつしやつて、あなたは大胆で無邪気でいままであなたみたいな方に、わたくしお会いしたこと一度もないわ、も一度おききたいんですけど、余り失礼なことでもわたくし自身うかがうことも、羞かしいくらいなんですけれど。」

「どんなことか知ら、何でもお答え出来るわ、あたい、おばさまも好きになっちゃった、誰でも好きになつて困るんですけれど。」

「おばさまといつて下さると、嬉しくなるわ、あのね、お愠りにならないで聞いててね、あなたは上山さんと関係がおありになるの、夜もご一しよだとおつしやるし、……」

「関係つてどんなことですか、あたい、関係ということ初めて聞いたわ。」

「おじさまはあなたとお寝みになつてから、どんな事をなさいますの、こんなふうにものを言うの、ごめんなさいね、だつて、こう言うより問い方がないんですもの、たとえばあなたをお抱きになつたりなさいますか？」

「いいえ、仰向きにねていらつしやるだけなの、抱いていただいたことないわ、ただ、あたいの方でふざけるだけなの。」

「だってそんな事ある筈ないと思うんですけど、まあ、あなたって方、女でもないみたいに、ちっとも羞かしがらないで、何でもふつうの事のようにおっしゃるわね、強く抱いたら潰れてしまうなんて、」

「潰れてしまうわ、あたい、ちいちゃいんですもの。」

「そんなに大きくなっていらっしやるじゃないの、おっぱいもお柵みたいだし、腕もまん丸くてあぶらで冷たいし、血色もいいし、それでおじさまが何もなさらないんですか。」

「あたい、おじさまのこもりうたかも知れないわ、ふうと来て、ふうと吹かれて行くだけなんですもの。でも、おじさまはたんと愉しいことを知っていながら、あたいに、してくださらない事になるわね、ずるいわ、あたい、おじさまに言ってやるわ、愉しいことを抜きにしちや厭だって。」

「そんな事おっしゃってはだめ、いままでどおりのおじさまで沢山じゃないんですか。わたくし詰らない事をお話しましたけれど。」

「あたい、これ以上愉しいことある筈ないと、何時もそう思っていたんですもの。」

「わたくしね、先刻いただいたお水をあんなに沢山持っていらっしやる訳が、お聞きしたいんですけど、どう考えて見ても判らないの。」

「あれは言えない、」

「なぜお笑いになります、だって水筒に一杯お水を持って講演会にいらっしやる訳は、とても判らないわ。誰にでも判りっこないわ。」

「そうね、おばさまにはとても、判りっこないわ、誰も判る人ないわ、誰にも知られたくないあたいのヒミツなんだもん、おばさまにもいうこと出来ないのよ、あたいのお口に手をかけて吐かそうとなすつても、頑として言わないわ、おじさまだけがその訳知っていらっしやいますけれど。」

「上山さんは何とおっしゃっていらっしやるの。」

「何時もお水をわすれるなど仰有るわ、あたいの何も彼も、みんな知っていらっしやるんだもの。」

「おからだに必^{いりよう}要なんですか。」

「そうなの、水がなくなると、あたいの眼が見えなくなるかも知れないんですもの。それよりか、一たい、おばさまは何故十五年もおじさまに、お逢いにならなかつたの、あたいの訳が聞きたいんです。おばさま、その訳を詳しくお話して頂戴、おばさまの顔は美しいけれど余りに白っほいし、お背中だって先刻さすつたときに感じたんだけど、まるで、

おさかなみたいに冷え切っていたわ。」

「わたくしあの時、ずっと血の引いてゆくぐあいが、すぐ判っていたぐらいですもの、冷えるの当り前のことだわ。」

「いいえ、その事をお聞きしているのじゃないわ。なぜ、おじさまにお逢いにならなかつたかという事なのよ、ね、それをお話して。」

「あなたにお水が必要でその訳が仰有れないように、わたくしがお逢いできなかつたことも、いま直ぐにはお話出来ないわ、」

「それもヒミツなのね、」

「ええ、そうよ、ヒミツなのよ。」

「おばさまはあたいをお好き。」

「え、もう、今日会場にはいると、すぐあなたのおそばに坐るように、頭がふいに報しらせたの。」

「頭が報しらせた？」

「そうよ、あの小さいお方のところに往け、そしておあいしろと言われたわ。」

「誰どなた方に、誰方がそう言ったの。」

「頭がそう作りあげたのよ、その時、あなたも扉の方にチラと眼を向けて、ちゃんと知っていらつしたふうじゃないの。」

「あたい、あの扉から誰かが来る筈だと、会場にはいると、すぐ、ずっと、思い続けていたわ、一ぺんも会つたことのない人だが、会えばすぐ打ち融けてお話の出来る方で、お話ししなければならぬことが沢山たまつてゐる方だとそう思つてゐたの。だから、お席をとつてお坐りになれるようにしてゐたのよ。」

「あなたは嬉しそうににこにこしてたわね。」

「あたい、おじさまがバカを言わないかと、それが可笑しくて。あなたはどうしてご講演中うつむいてばかりいらつしたの。まるで聴いていらつしやらないふうだったわ。」

「お顔を見るのが羞かしかつたし、見られまいと懸命にうつむいてゐたの、そして遂に一度も見なかつたわ。」

「何故、お顔をお見せにならなかつたんです。」

「あの方にはお逢い出来ない訳がありますのよ。」

「どうして。」

「どうしても、」

「あたい、おじさまにあなたにお目に懸ったって、きょう帰ったらお話するわ、まあ、そんなにお顔の色を変えちゃって。お話するのが悪いんですか。」

「あなたに何も言つて下さるなど言つたつて、とても、だまっではいらつしやらないわね、けれど、おじさまはわたくしにあなたが会つたと仰有つても、そんなばかな事があるものかと、信じてくだらないわよ。」

「何故か知ら、だつてこうしてお会いしているの？ おばさま、お手々出して、こんなに確かにぎつているのに、嘘なんかじゃないでしょう、おばさま、キスしましょう。」

「まあ、あなたつて何てコドモさんなんでしょう、でも、キスすること知っているわね。」

「おじさまと何時もしているんだもの、あたい、の、つめたいでしょう。」

「ええ、とても。」

「あら、あら、おばさま、皆さんが出て来たわ、講演が終つちやつたのよ、あたい、こうしてはいられないわよ、おばさま、一緒におじさまの処に行きましょう。きつと吃驚びっくりなされるわよ、あら、そんなお顔をお変えになつて一体何処にいらつしやるの。」

「わたくし、これで失礼します。」

「ね、おじさまにお逢いになつてよ、あたい、うまく取りなしておあげするから、一緒に

いらつしやう。」

「若しわたくしのこと仰有るようだったら、わすれないでいますと、そう仰有つてね、お仕合せのようにつてね。」

「おばさま、往つちやだめよ、だめよ、往つちや。」

「では、おわかれするわ、おりこうさん。」

「おばさま、お手手出して。」

「そうしていられないんですよ、では、あなた、おじさまを好く見てあげてね。」

「よくして上げるわ、往つちやいけないというのに。」

「じゃね。」

「おばさま、おばさま。」

「……………」

「あ、往つちやつた、せつかく、大事なお友達が出来たのに往つちやつたい、おばさまのばか、戻つて来て、おばさま、……………」

「おじさま、あたいよ。驚いたでしょう、ちゃんと来ていたのよ。」

「吃驚するじゃないか、ちんぴら、どうして来たんだ。」

「ここ開けてよ、ずっと、ご講演を聴いていたのよ、飛んでもない事、おっしゃるかと思つて心配しちゃつた。ここ、開けてよ。」

「お這入り、あんなに來ちやいけないうつて言つていたのに、困つた奴だ。」

「だつてお家にひとりでいるのが、胸がやきもきして、とても、たまんなかつたもん、ご講演よく聴えたわよ。」

「でも、よく、ひとりでくるまを見附けて乗つたね。」

「駆けずり廻つてやつと見附けたのよ、このくるま新聞社なのでしょう。」

「送つてくれるんだ、家まで。」

「あたい、赤い旗の立つているくるまに乗るの初めてだわ、とても、勇ましいわね。」

「水を持つているね、水筒なんか提げて要心深くていい。」

「おじさま、お話したいことが沢山あるのよ、此方お向きになつて。」

「むずかしい顔をして何を言い出すんだね、くたびれているから、少時、何も言わないでくれ。」

「大変な事があつたのよ、くたびれたでは済まないわよ、きょうね、あたいの横に坐つて

いる方がいてね、顔色があお白しろいんだか白しろいんだか判らないくらい、乳のような色をして
いる方がいらつしたの、うつ向いて講演を聴いていらつしやるのよ、おじさまに顔を見
られはしないかと、そればかり気にしているような方なのよ。」

「演壇からは人の顔なんか、暗くて見えはしないよ。」

「そのうちその方がきゆうひとに酷ひどそうに、呼吸困難みたいになつちやつて、あたい、吃驚びっくり
して水をあげたのよ、そしたら落ち着いて、ふうと呼吸もふだんのままになつて来たのよ
。」

「よく気がついたな、心臓が悪い人らしいね。」

「よくわかりね、おじさまは。」

「何だ、人の顔をじつと見詰めたりなんかして、へんな子だ。」

「その方をお廊下の方におさそいして、憩やすませておあげしたの、もう、おじさまのお話が
済んだ後だったから、クツションの上で永い間お話したわ、水のようにお廊下に人気がな
くて、その方の顔の色があたいの五体にしみ亘るほど、へんに冷たかった、おじさま、そ
の方は一体誰だと思ひになる、……」

「さあ、誰だかね。」

「おじさま、言つて上げましょうか。」

「妙な顔をするじゃないか、知つている人なら早く言いたまえ。」

「吃驚しないでよ、田村ゆり子という方なのよ、とても鼻すじのきれいな方、あら、おじさまの眼の中がきゆうに動くのが停つちやつた。」

「田村ゆり子」

「そうなのよ、田村ゆり子つていう方なのよ、どう、吃驚したでしょう。」

「自分から田村ゆり子と名を言つたの、」

「あたいがお訊きしたからよ、そしたら水筒の水をおあげしたときに、上山つて書いてあつたのをお読みになつたらしいわ、きゆうに眼をあたいにじつとそそいで、こう、おつしやつたわ。あなたは上山さんの誰方だとおいいになつたから、あたい、おじさんの事何でも見てあげている者だといつたら、お幾つとお聞きになり、あたい、十七歳だとおこたえしたわ。そしたらあたいの顔をまたじつと見直して、あたいのことがみんな解つているふうだつたわ、どうかすると、おじさま、あの方、あたいがおじさまのどういう者だかも、ちやんと解つているらしかつたわ。」

「それは解るまい、いや、解つているかも知れないが、確かに田村ゆり子といつたね、ど

う考えても、そんな女がいまごろ現われるなんてことは、ありえないことだ、本当のことを言おうか、その田村ゆり子という女は、とうに死んでいる女だ、死んでいる人間があらわれることは絶対でない。」

「まあ、死んでいる方なの。」

「その名前の人なら死んでいる、きみの話した人はその人ではないんだ、怖いかな、怖い。」

「思い当ることが何かあるの、こまかく言っごらん。」

「たとえば余りにお綺麗で、何も彼も知っていらっしって、空とぼけていらっしやるふうだったわ、あたい、しじゆう、ぞくぞく嬉しいような悲しいみたいな、それで気味が悪いような時々いやあな気がしていたわ、死んでいる人だといえはそんな気もしないではないのですが、不思議なことがあったわ、」

「どんなことなのだ。」

「あたい、気のせいかな、おばさまの手をにぎって見たくて、きゅつと、握っちゃったの、あら、いつの間にかあたい、その方をおばさまと呼ぶようになったの、わずかの間にそういうふうに親しくなっていたのね、その時にね、おばさまの左の手に一つの傷あと

を見つけたの、金属の擦過傷のようだったので、これ、どうなさいましたと言ったら、すぐ手をお隠しになったわ、あたい、そこに腕時計がふだんから嵌められていた痕が、あかくのこつているのを眼にいれたの。」

「腕時計のあとだって、」

「それが時計の形とくさりの痕が、まるでその儘ままでのこつていたのよ、だから、あたい、お時計きようはあそばさないのといったら、こわれているものですからと仰有っていたわ、言葉がともきれいな方なのね。その時のお顔の色つたらとても悪かった。」

「その傷というのは酷こくなっていたの。」

「そうよ、残酷に時計を手頸てくびからもぎ取った瞬間の傷あとだったらしいわ、あたい、その訳を聞こうとしたけれど、仰有らなかつた、きつと、おじさまがお奪とりになつたのでしようと言うと、上山さんじゃないと仰有つたわ、その他のことは何も仰有らなかつた。まあ、おじさま、何ていやなお顔をなさるの、おじさま、おじさま、慄え出しちゃった、……」

「そんな人が物をいう筈がない、だが、その時計の話はほんとのことなんだ、明け方に心臓マヒで倒れてから、五時間誰もその部屋にはいった人間がいなんだ、掃除夫が鍵のかかっていないドアから何気なくすかして見ると、田村ゆり子は仰向けになって畳の上で死

んでいた、その時にまだ時計はうごいていたのさ。」

「だっておじさまは何故そんなお顔をなさるの、また、額から汗がにじんで来たわ、ひよつとするとあぶらかも知れないわ。」

「おじさんの驚いたのは、その女ときみとが話をしたということに、驚いているんだ、きみはその女をまるで知らないくせに、いま言うことがみんな本当のことなのだ、その實際のことにやられているのだ。」

「お背中をさすつておあげした時、なりの高い方だということが、背中のすじの長いことですぐ判ったわ。」

「どういう声をしていたんだ、声のことを言つてごらん。」

「柔らかくて聞き返す必要のない透った声だったわ、あたい、あなたにお目にかかったことをおじさまに、みんなお話するというと、お停めしてもきつと仰有つておしまいになるから、おとめしないと仰有つていたわ。」

「そして何か言伝がなかったか。」

「あたいにね、おじさまを好く見てあげてと言っただけだわ、きようは十五年振りにお目にかかれたと、それきりお別れしちやった。いくら呼んでみても振り返りもしないで、出

口の方にお行きになったのよ。」

「たしかにその人は田村ゆり子と言ったんだね、きみが介抱してあげた人がぐうぜんに、そんな名前の人だった訳じゃないね、時計のことも、ぐうぜんに似た話だとするより、おじさんの考えようがないんだが。」

「その女の人はおじさまの一体何なのよ。それから聞かないと話が判らないわ。」

「それは田村さんの書いた物をおじさんが読んで上げていたんだ、そうだな、五六年も間を置いて続けているうち、突然、書き物の原稿を送って来なくなったんだ。すると或る日警察の人が来てね、田村ゆり子が昨夜急死したと言って、おじさんが署に連行されて調べられたんだ、おじさんは家にも来て顔は知っているが、アパートの部屋などにはまるで一度も行ったことがない、だから死因も何も判っていないのだ、警察ではおじさんからの原稿を廻送した封筒から住所が判ったらしく、そんな封筒までちゃんと取ってあったそうだが失くなっていたからでしょう。」

「おじさまは女だとお節介ばかりなさるからよ、警察からじゃ、いやあね。きつとお時計が失くなっていたからでしょう。」

「時計と外に洋服なども失くなっていたらしく、牛乳屋さんが配達に廻ったときに、ドア

が開け放しだったそうだが、犯人は出なかつたらしい。」

「おじさまの嫌疑は？」

「事件と関係がないことは直ぐ判ったさ、だが、その急死と同時におじさんは永い間見ていた原稿の内容から、田村さんという一人の女が、役にも立たない原稿を書きながら死んだということが、小説風な情景で頭にのこったのだ。」

「原稿はお上手だったの。」

「ふつうの人と変ったところはない、寧ろ拙い方だったかも知れないね、ただ、飛び切った二三行くらいの面白いところが処々にあつたくらいだ、それは男の人と友達になると、すぐ此の人もだんだんに親しくなつて、言い寄つて来ないかと、それが見え透いて来るこゝとが恐いと書いていたことだ、そしてその男が田村さんに口説いてくると、一遍に、避けてしまうという妙なくせのある文章の人だったのだ。」

「おじさまもきつと、引きつけられていたのでしよう。」

「田村さんの小説がそんなふうなので、何時も先を越されている気がしていたんだよ、あの人がいま頃出てくるなんて事はないさ。」

「でも、あたい、ちゃんと見たんだもん。」

「へんな事が重なるものだね、」

「おじさま、何処かでお憩やすみにならない、銀座に来たわよ、あたい、塩からい物がたべたいわ。」

「降りよう、バーに行こう。」

「お酒あがれないくせに、よくこの頃バーにいらつしやる。」

「彼処に坐っていると皆さんの酒気が漂うて来て、頬が熱くなって酔ったような気がするんだ。」

「いらつしやいませ。」

「何か塩からいものを頂戴、それから、おじさまはなあに。」

「何でもいいよ、匂いをかぐだけだから。」

「あら、金魚がたくさんいるわね、みんな、あたらしい水をほしがって、可哀想にあぶあぶしてひどそうだわ、あの、この金魚の水くさりかけていますから、可哀そうだから取りかえて上げて。」

「毎日お店に出てくるとすぐ、お水かえるんですけれど、きょうはつい忘れてまして。」

「それからお塩をひとつまみ入れてあげて。」

「お塩がいいんですか。」

「くたびれた金魚にはほんのちよつぱり、お塩がいるのよ。おうい、ちびちゃん、お塩気がほしいんでしょう、そう、そうなのね。おじさま、ちゃんともう判つていて、そばに寄つて来たでしょう、なに言つているのか幾らおじさまでも、このヒミツは判りっこないでしょう、お姉さまは何処からどうしていらしたつて、そんな恰好かっこうがどうしたら出来たのと、皆、眼に一杯ふしぎな色を現わして、言つているのよ、口を開けて瞬きもしないであたいを見ているでしょう、あたいも見てやる、」

「きみ、あまり変なことというと、皆がへんな顔をするよ、身元を洗われるよ。」

「あ、お水が来たわ、そのお水ここに頂戴、あたいが入れてあげるから、みんなおつむをならべるのよ、したしたと、……どう、とても、さつぱりと快いい気持でしょう、したしたというこの音たまらないわね、みんな鱗の色も悪いし痩せているのね、硬い麩ほばかり食べているからよ、ほら、好きなお塩よ、それをぐつと飲んで胃ぶくろがひりついたぐあいが、とても、たまらないでしょう、みてご覧、ほら、ほら、眼につやが出て来たし、紅鱗たちまち栄えて来たわ。」

「いい加減にしないか。あの方、まるで金魚のご親戚みたいに何か言つていらつしやる。」

よほど、金魚がお好きと見えるって言っているじゃないか。」

「人間にあたいの化けの皮がわかるもんですか、おじさま、ひさしぶりで不倅なお友達の様子を見て、おじさまがあたいを大事にしてくださいることが、どんな仕合せだか判つてきたわ、おじさまに、お礼をいうわ。」

「だからね、金魚とお話するの止めるんだよ、皆さん、変な顔をしているじゃないか。」

「大丈夫、ちび達がはなれないんですもの、あら、白い黴かびのようなおできが出来ている子もいるわ、すぐ取らなくちゃ大変なことになる、……済みませんがお茶碗一つ貸して頂戴、この子をべつにしてかびを取らなくちゃ、じつとしていて、痛いのを我慢しているのよ、すぐ済むわよ、ほら、剥げたわ、このあとに塩をぬつてと、さあ、もう遊んでもいいわよ、明日はさつぱりするから。」

「お嬢様は金魚屋さんみたいですね、どなたがいらつしつても、金魚のことなんか些ちつとも見てくださらないのに、ご親切にして頂いて済みません、皆、お嬢様の方を見上げていますわ、言葉が解るような顔をしているんですもの。」

「ええ、あたいが好きだから、金魚の方でもわかるらしいのね、おじさま、金魚がおじさまのことをあなたの誰だと訊ねているわよ、だからあたい、この人はあたいのいい人だと

言つてやったわ、そしたら皆がうふふ、……つて笑っているわよ、あのこえ、あんな賑やかなの聴えて、おじさま。」

「聴えるもんか、みんな金魚つて同じ顔しているじゃないか。」

「でも、顔の一つずつがみんな異っているわよ、親子姉妹別々な顔をしているわ、よく、くらべて見ると判るわよ。あたね、お願いがあるんですけど、きつと聴いていただけのわね。」

「何なの、」

「この金魚ただけじゃないかしら、此処に置くの可哀想だから連れてかえりたいの、みんな不合せなんだもの、この儘、見て戻ったら、あたね、気になって今夜はとでも睡れそうもないわ。」

「別の金魚を買つて貰うことにしたら、きつとくれるよ、気になるなら買つてあげよう、訳のないことだ。」

「有難う、おじさま、五尾で百円出せばいいわよ、たんと出す必要ないわ、あたね、値段みんな知つてんだから。」

「では百円出すことにしよう。そろそろ帰ろうね。」

「ええ……あら、誰でしょう、誰かが扉の間から此方を覗いて見ているわ。女給さん、誰方か、いらつしつていらっしゃるいわよ。」

「あの人、蠟ろうけつ染ぞめの物を売っている方なんです。おいりようだったら、そう言いましようか、何時もは中に這入はいつていらつしやるんだけれど、今日はどうしたんでしよう、お這入りにならないわ、……」

「あら、ちよつと俵まつてておじさま、きよう会場にいらつした方だわ、違いないわ、横顔がおばさまそつくりだもの。おばさま、おばさまじやないの、あら、扉から顔を外しちやつた、おじさま、あたいたい、ちよつと追つかけて行つてみるわ。」

「何言つているんだ。」

「おばさま、田村のおばさま、あたいや、昼間、お水をあげたあたいや、ちよつと俵まつて、其処の小路は行き停まりなのよ、おじさまも一緒に、先刻からおばさまのお話をしていたところなのよ、ねえ、引き返して頂戴。」

「きみ、人ちがいだよ、蠟ろうけつ染なんておかしいじやないか。」

「おじさま、表に出ていらつしやい、ほら、此方をお向きになつた、おばさまだ、あの方よ、あの方なのよ、行き停まりなものだから、まごまごしていらつしやる。ね、おじさま、

堀の処を見るのよ、真正面で少しの惑いもなく立っていらつしやるじゃないの、見てよ、見てよ。」

「見た、たしかに田村ゆり子だ、幾らぼやけたって嘘のない顔だ。」

「おじさま、何か仰有い、おじさまの仰有るのを待っていらつしやるふうだわ、あ、お口が少しずつあいた、お微笑いになった、おじさま、腰をかがめて遂に挨拶なすったじゃないの、おじさまもご挨拶をなさい、早くよ、早くするのよ、笑ってお上げするのよ、なんて臆病なおじさまなことか、やつとしたわ。おばさまの嬉しそうな顔つたらないわ、ふだん、あんなお顔で微笑つていらつしたの、凄い美しい顔だナ。」

「きみ、呼んで見たまえ。」

「おじさまが呼んで上げるのよ、あら、おばさま、其処の煉瓦^{れんが}堀の穴は抜けられないわよ、おからだに傷がつかます、あたい、其処にいま行きますから。」

「行つてつかまえてくれ。」

「死んだつてはなさない心算^{つもり}で、お手々にぶら下がるわ、おじさまもいらつしやい。」

「うむ。」

「おばさま、其処の穴は欠け石でがじがじして危いつたら。抜けたつて向う側はどろどろ

川なのよ、墜おつこつたら死んじまう。」

「くぐつたね、早いね。」

「あ、穴の外に潜つて出ちやった、あれ、水の音じゃない、ごぼんといったのは？」

「そう、水の音響おとかな。」

「おじさま、また汗とあぶらが先刻みたいに、額ににじみ出たわよ、」

「黙っている、何か聴える。」

「おばさまの声だわね、うなつていらつしやるようね、水の中からかしら、それとも、
…」

三、日はみじかく

「あたいね、先刻から考えていたんだけれど、こんな立派な入歯をお嵌いれになつても、おじさまは、お年だから間もなく死ぬでしょう。」

「そりや死ぬね、黄金キンの入歯だつて何にもなりはしないよ、けど、これで何でも嚙めるから至極安楽だね。」

「齒齶はぐきの作りがみんな黄金キンでしょう、一体、どれだけ目方があるか知ら。」

「何なんもんめ 勿な あるものかな、何故、そんな事を聞き出すんだ、極り悪そうにしてき。」

「おじさまが死んじやつたら、誰が一等先に入歯を取つちやうか知ら。」

「誰だか判らないな、或いはきみかな、きみは、黄金キンをほしがっているんじゃないか。」

「あ、当つちやつた、あたい、おじさまがお亡くなりになったら、それ、誰よりも先に戴くわよ、それで耳輪と指環とをこさえるの、いまからお約束して置いてね、きつと、やる
と仰有つて置いてよ。」

「やつてもいいけれど、口の中に指を入れて入歯を外すときに、噛み附いて見せるから、それが怖くなくなつたら取るんだね。」

「ほんと、噛み附く気なの、だつてお約束だからいいじゃないの。」

「その時の気分次第なんだよ、腹が立っていたら、指先をがにと噛んでやる。」

「死んでいる人が噛み附くことなんか、ないじゃないの。」

「口だけ生きのこつてやる。」

「ふふ、したらあたい、先におじさまの口の中に筆の穂をいれて、まだ、生きていらつしやるかどうか、試して見てからにするわ、擦つたがらなかつたら、直ぐ外すわ。」

「僕は撥つたくても、じつと我慢していて、指先が口の中にはいるのを待ちうけている。」

「いやよ、そんな意地悪するなんて、くださるものなら、あつさりとかくださるものよ。」

「やるよ、死んでまで噛みつきはしない、ただ、そういつて見たかっただけだ。」

「先刻からのお話をみんな聞いていて、ボックスにいる方、笑っていらつしてよ、でも、あの方、おじさまの顔とあたいの顔とを見くらべていて、どんな間柄だかを読んでいるみたいね、あの眼どうでしょう、些ちつとも、智恵のまじっていない眼の美しさだわね。」

「利いたふうなことをいうね、ああいう眼をしている人は、も一つ奥の方に別の眼を持つていて、それが何でも見とどけているかわりに、表側の眼はいつも留守みたいに美しく見えるんだよ。」

「誰方かを俵まつてらつしやるのか知ら？」

「さあね、なかなか好い顔をしている。きみみたいに、やはりぽかんとしているけれど。」

「ご挨拶ね、あの方、あたい達が入つて来ると、すぐ後からいらつした方よ、あたいの顔ばかり見えていて、お話しはなししかけるみたいように、にこにこしていらつしやるじゃないの。」

「金魚の化けの皮が判っているのかも知れないよ、珈琲は喫まずに水ばかり飲んでいるからだ。」

「あたい、あの方と、お話して見ようかしら。」

「それより出がけに來たてがみを見せてくれ。」

「ほら、はい。これを読むといい氣持よ、このお嬢様のお母さまの小説なのよ、いいか悪いかは解らないから、読んでいただきたくって、お嬢様の手紙がはいっているのよ。」

「こういう場合もあるんだね。」

「お母さまがおじさまに直接に、手紙をお書きになるのが、きつと極りが悪いのね、あた、こういうお嬢様になつてみたい。」

「もう一通のは？」

「おじさまのお家の前を往つたり來たりしているのは、実はわたくしなのでございます、時間は五時、もしおてすきでございましたらお会いくださいまして書いてあるわ、あたい、そのお時間に出て見て、いらつしたらお通しするわ。構わないでしょう、五時なら何時もほかんとしていらつしやるお時間だから。」

「お通してもいいよ、べつにほかんとしている訳じゃない。」

「だつて何もなさらないで、茫乎^{ぼうつ}としていらつしやるじゃないの。あたいね、昨日ふいに（海をわたる一尾の金魚）と、書いてみたのよ、とても大きい海のうえに金魚が一尾、反

りかえつて燃えながら渡つてゆく景色なのよ、そう考えてみたら、あたい堪らなく絵がかきたくなつちやつた、その反歌がふいに出たわ、（山を登つてゆくあたい、）というの。

「ふむ、（海をわたる一尾の金魚、）か、」

「聞えたのかしら、あの方、こんどは公式にわらい顔をしていらつしやるわよ、きつと、おじさまのお名前を知っている方なのよ、だから、あんしんして笑つて聞いているのよ。」

「きみの声が大きいらなんだ、海をわたる一尾の金魚と聞いただけで、ぷつと笑いたくなるじゃないか。」

「金魚はおさかなの中でも、何時も燃えているようなおさかななのよ、からだの中まで真紅なのよ。」

「何故そんなにさかなのくせに、燃えなければならぬんだ。」

「燃えているから、おじさまに好かれているんじゃないの。」

「そうか、」

「おじさまの胃潰瘍だつてあたいが入つて行つて、舐^なめて上げて、お薬をたんと塗つて上げたから、治つたのじゃないの、あたいの燃えた^{リン}燐があんな大きい胃袋の傷まで、お治し

してしまつたじゃないこと、なに言つてんの、そんな濃厚なお菓子まで召し上れるようになったのも、みな、あたいの燐リンのせいなのよ。」

「それに病院のくすりの事も、わすれてはならないんだ。」

「病院の薬はただの物質だわよ、あたいの燐リンと、鱗うろこのぬらぬらは、みんな生きているぬらぬらなのよ、いちど胃腸にはいつていつたら、あたい、めだかのように憔悴して出てくるの、おじさまにそれが判らないの。」

「判るよ、大きな声を出すと、ほら、またあの人あの人が笑うじゃないか。」

「あの方、ここに呼んでみるわ、誰も来もしない人を俵まつなんて、どうかしている。」

「話しかけるのはよしなさい、なれあいの金魚みたいに、人間はすぐ友達になれるもんじやない。」

「それもそうね、あたい達はすぐお友達になつてしまふけれど、人間はそうはかんたんに、お友達になれないわね。」

「きみ電話だよ、歯医者歯医者の治療時間なんだ。」

「じゃ、行つてまいります。此処ここにいてね、四十分くらいかかるけれど、きょうで、もうお終いだから我慢してね。」

「二人とも齒が悪くては困るね。なるほど、齒医者さんにはちやんと、くちべにはおとして出掛けるなんて、感心だね。」

「でなかつたら先生の手も、お道具も、くちべにで真赤になるじゃないの？ どう、とれましたか。」

「とれたよ、くちべにを取ると、まるでぼやけた顔になる。」

「くちべには女の灯台みたいに、あかあかと点っているものよ、消えたら、心しんまでしょんぼりしてくるわ。じゃ往つて来ます、あの、それから、あの方とあたいの留守中仲よしになつたら、きかないわよ、うふ、あたいつて妬きもちやきだわね。」

「大きな声を立てると聴えるよ、ほら、お金、」

「きようのおきまりの煙草はもうあがつているから、あとは半本だつてお喫みになつちやいけないわ、煙草の箱、持つてゆくわよ。」

「一本だけ置いて行つてくれ。」

「だめ、つい一本が二本になるから、煙草を見たら、毒と思えということがあるわ、温和ましく俟つていらつしやい。じゃ、往つて来ます。」

「あら、何時かのおばさま、ほら、講演会でお会いしたおばさま、あたい、ちらつと見て、すぐ判っちゃった。」

「お一人じゃないわね、ずいぶん、大きくおなりになったのね。」

「おじさまとご一しよなの、さあ、行きましよう、おじさま一人でお茶喫んでいらつしやるから、恰度ちやうど、いい時分だわ、何時か袋小路でお逃げになったでしょう、でも、きようは放さないわよ。」

「きようも急ぎの用事があるんで、こうしてはいられないの。だから、おじさまにはお会い出来ないわ、あなたとだけ、ちよつぷりお話するけど。」

「そんな事いわないで、いらつしつてよ、おじさまはきつとお喜びになります、妙ね、齒のお医者様の所にくると、きつと、お目に懸れるなんて、此間もそうだったわね。此間は どうしてあんなにお逃げになったの。」

「羞かしいからでしょう、こんな穢きたない恰好しているから、お会いしたくないのよ。」

「ちよつとでもいいんですからいらつしつて、ここ、放さないわ。」

「おじさまは、あなたを可愛がって、くださる、……」

「ええ、そりやもう、何だつて言うこと聞いてくださるわよ、あたいのお臀かゆだつて痒いっ

て言えば、搔いていただけけるし。」

「まあ、お臀だつて、……」

「あたいがこんなに小ぢやいでしよう、だから子供だと思つていらつしやるのよ、ほんとは、あたい、子供なんかじゃありませんですけれど、そして何だつて知つていますのよ、おばさまがお会いにならないわけも、ちゃんと判つているのよ。」

「では、その訳いつて頂戴、どうしてお会い出来ないかということをおね。」

「おばさまは、ゆうれいでしよう、だからお会いになれないのでしよう、ほら、へんなお顔になつたわ、むかしのゆうれいは、川のそばの柳の木の下にいたけれど、このごろは、ビルの中からも出ていらつしやるわね。」

「そのゆうれいが物を言うのね、ほほ、でもあなただつてゆうれいじゃないこと。」

「あたい、生きてぴんぴんしています、何でも食べているし、決して逃げたりなんかいたしません。」

「いたしませんけれどね、人間に旨く化けていらつしやるじゃないこと。」

「ばれちやつたわね、おじさまが小説の中で化けて見せていらつしやるのよ、もとは、あたい、五百円しかない金魚なんです。それをおじさまが色々考えて息を吹きこんで下す

っているの、だから、水さえあれば何処にでもお供が出来るんです、そしてあたい、甘ったれるだけ甘ったれていて、何時も、おじさまをとろとろにしているの、おじさまもそれが堪らなくお好きらしいんです。」

「あの方は元からそういう方なのよ、めだか一尾水盤に入れて、いち日じゆう眺めていらつしやるような方なのね、何が面白いんだか判らないけど、飽きることもないらしい、そして突然顔をあげると街の中を歩くために、お家から飛び出しておしまいになる、……」

「そしておばさまとお逢いになる、おばさまは何時の間にか死んでおしまいになった、そのお化けさんがおじさまの隙間を見つけて、所と時間を構わずにおはいりになる、……」

「そこで金魚のあなたに見附けられたということに、なるわね。でも、金魚を見附けたことはさすがにおじさまだけけれど、金魚だつて当節油断がならないわよ、あなたみたいな大胆な金魚もいるんだから。」

「あたいね、金魚だつてこと見破られたこと、はじめてなの、何時もそれが気になるんだけど、ゆうれいのおばさまに会ったら、かなわないわよ、けどね、おばさまがゆうれいだということ、ほんとうの事か知ら？」

「触ってみるといいわ、冷たくないでしょう、ほらね、ここに手をいれてみたつて判るで

しよう、こんなに、ほかほかと温かいでしょう。」

「ええ、おっぱいもあるし胸のふくらみもあるわ、やはりうれしいという事はうそなのね、あたいの金魚だということは本物だけれど、あ、おばさま、何時の間にか来ちゃった、此処なのよ、ほら、彼処に一人でぽつんとして坐っていらっしやるでしょう、あれもうれしいのおじさまかも知れないけど、ね、お這入りになって、ちよつともいいから、逢っておあげしてね、あら、先刻の人がそばに来て何か言っているわ。」

「じゃ、わたくしこれで。」

「だめだと言ったら、顔だけでも見せておあげしてよ。」

「わたくしの方で顔を見たから、それでいいのよ、おじさまはわたくしなんか見なくとも、見る人がたくさんおありになるんですから、じゃ、大事にしてあげてね。」

「また往つちやった、何て脚の早い人なんだろう。おじさま、ただいま、あら、ご免遊ばせ。」

「この方はね、先刻の手紙の方なんだ、きょう夕方いらっしやる筈だったが、丸ビルに用事があつていらっしつて偶然に出会わして、あとを躡けて見えたんだそうだ、はは、後をつけたなんてこれは失礼。」

「でもおつけしたことは実際なんですもの、お目にかかれてとても嬉しゅうございますわ、齒の方、お治りになったんですか。」

「ええ、もうすつかり、……」

「では、わたくし、これで失礼いたします。」

「そお、その内、宅の方にいらつしつて下さい。」

「ご免遊ばせ。」

「変な方ね、あたいが帰つてくると、碌に話もしないで往くなんて、あの方、おじさまがとうから知っている方なんでしょう、それをあたいがまだ子供だと思って、誤魔化していらつしたのね、ちゃんと判るわ、あたいのいない間にたんとお話したのでしよう。どうも、にこにことお話したそうな様子がおかしいと思つていたら、当っちゃった、何、お話していらつしたの。」

「きみの事さ。」

「あたいの何をお話していたの。」

「きみは僕のお嬢さまかと聞いたから、まあ、そんなものだど答えたんだ。そしたら、とても、お小さいけれどお利口そうだと言つていた。」

「妬きもちやきで困ると、仰有ったのでしょうか。」

「それも言つて置いたよ、何でも油断のならない子だと、」

「あたいが金魚だなんて、仰有りはしなかつたでしょうね。」

「それは言わなかつた、言つても本当だとは思わないからだよ、金魚がそんなに巧く人間の形をととのえることは、予想以上のことなんだ。」

「で、一体、何のご用があつたの。」

「ちよつとした事だ、きみに言つたつて判りつこのない事だ。」

「たとえば？」

「きみには判らないことなんだよ。」

「あたいに判らないことなんか、一つもない筈よ、匿さないで言つて頂戴、あたい、はじめあの方に好意を持つていたけれど、おじさまを奪^とりあげるような人は、悉^{ことごと}くみんな敵に廻すわ。」

「手厳しいな。」

「何か隠していることおありでしょう、きっと、隠している。」

「隠してなんかいるものか。」

「お顔の色が曖昧だわよ、気を付けて、誤魔化そうとしていらっしやる。おじさまは、そんな時には、眼をあたいからそつとお外らしになるもの。」

「もう、此処を出ようじゃないか。」

「白状しなきゃ出ないわ、何時までも、坐つててやる。」

「じゃ、きみ一人いたまえ。僕はもう帰るから、給仕さん、勘定して下さい。」

「とうとう、白状しなかつたわね、じゃ、あたいも、或る女の人に会つたこと言つてやらない。」

「誰に会つたの、廊下かね。」

「そんな事いう必要はないわ、おじさまが言わないのに、誰がいうもんですか。」

「例の講演会であつた人の事だろう、きみの知っているのは彼の人の外には、凡そ人間のうちで誰も知っていない筈だ、どうだ当つたらう。」

「巧くお当てになつたわ、以心通じるものがあるのね、あの方、突然、廊下であたいを呼び止めたの、おじさまが来ている事、ちゃんと知つていらつしたわ。」

「僕には逢いたくないと言つていただらう。」

「あんまりお逢いしたい時には、逆に人間は逢いたくないというものらしいわ、それでい

て、逢わないで帰ってゆくのは、なんとも言えないつらい気分があるらしいわ。」

「どんな顔色をしていた。」

「ええ、お顔ははれはれしていました、脚が早くて別れたとおもうと、もう、階段を降りていらつした。あたい、おじさまに釣られてみんな言つて了つたけど、まだ、おじさまは彼の人のことは些ちつとも話さないわね、一たい、どういいうお話をしていらつしたの。」

「引つくるめていいうと税金の話なんだ、あの女はこの頃、何でも働きつづめてやつと穴を抜け出したらしいの、穴つて抱えの家のことなんだがね、そしたら二年分の税金がどかつとやつて来たというんだ、二年間で八万何千円という税金の告知書を目の前に置いて、眼がくらんだそうだ、それを抱え主がすぱつと払つてくれたんだ、べつに頼みもしないのね、そこで、ほら、あの女はもとの商ばいに逆戻りさせられるといふことになるんだ。」

「税金がまた穴ん中にあの方を突き墜したことになるのね。やつと匍は匍い上つたところを、頭から無理やりに突き戻して了つたのね。」

「僕はそんな話を初めて聞いたが、税金を払うためにね、どれだけの人間が死ななくともいい命を死んだことか。」

「その税金の女の人とおじさまと、どんな関係があるといふの。」

「関係はないんだけど話だけは聞いてくれというんだ、だから僕は話を聞いたのだ、あの女が抱え主から逃げ出したことを聞いたのだ。」

「払えないものね、ところでおじさまにその金払ってくれというの。」

「きょう会ったばかりの人が、そんなことをいうものか。」

「では、おじさまのお名前を知っているということだけで、それを言いたかったというの。」

「そうだ、巧く言いあてたよ、わたくしはそれ以外に何ものぞまないと言っていたけれど、僕はこういつて見たのさ、では、あなたは或る特定のお金をさしあげれば、僕と食事をし一日遊んでくれますかと言ったら、ええ、と答えてくれた、では、あなたはいま僕の言ったような事をいう相手に、みなそういうことを希み、またそれを平気でやりますかという、多分、それはそう致しますまいと答えていた、つまりその女は頭をつかう仕事が見たいというんだ、事務員とか経理の方とかの、頭のいる仕事を見附けたいと言いつづけていたのだ。」

「ところでおじさまはどう仰有って、あの方のみちを開いてお上げになったの。」

「僕は煙草のケースを進呈しただけだ。」

「ケースの中に、何時もの癖で、お金匿して持っていらっしたのでしよう。」

「うむ、まあね。」

「どうも煙草を取り出すふうもなさらないのに、ケースをよく持っていらっしやると思っ
ていたわ。女の人はそれを平気で受け取ったの。」

「貰つてもよい人から貰つたふうで、受け取っていたようだ、そしてわたくしどのように
仰有ることをおつとめしたらいいのでしょうかと、真面目な顔附で言つたのだ、きみの言
い分ではないけれど、叡智えいちのない水みみたいな眼で、僕をおだやかに見ていた。」

「で、おじさまは、何かお約束をなさいました。」

「僕はまた割りのよい仕事で金は取れることもあるんだから、その金で逃げられるだけ逃
げなさい、いまのあなたには逃げるより外にみちはない、誰でも人間は逃げなければなら
なくなつたら、姿を消すにかぎるといったら、わたくしもそれに限ると思ひますと言つた
で、ね、きみ、この女の人はきよう出掛けに僕の家の前をぶらぶらして、僕らが出か
けたあとから、ずっと街まで躓けて来ていたんだ。」

「おじさまは、底なしに女にあまいわね。」

「僕があまいんじゃないやなくて女の方があまいんだ、僕は断ることは知っているし、知らぬ他

人に誰が金なぞやるものか、ところが人間の心にはずみが出来た瞬間には、実に綺麗に對手に応ずる気合があるもんだよ、つまり割りのよい仕事が廻って来て失ったものを、別の人間が返してくれる場合だつてあるものだ、その予測というものが経験の中に生きているとしたら、生涯のある日にはそんな事の一遍くらいはあったっていいんだよ。それをしてないのは、人間の価値をなくする吝な奴の仕業なんだ。」

「その後で女の方が、おじさまの後を趁おうて来たらどうなさる。」

「趁えば趁うて来るで、いいじゃないか。」

「しまいに、ぐるぐる捲きに捲いて来るわよ。」

「その時はその時だ、捲かれてよかつたらそのまま捲かれていてもよいし、悪かつたら抜ければいい、情痴じょうちの世界はその日ぐらしでいいもんだよ。」

「税金といえばあたいにも、税金がかかっているわ、金魚屋さんにいた時、おじいさんは税金をこまかく計算していてね、一尾ずつにみな少しづつかけていたわよ。」

「きみの五百円は高かった。税金が二割くらい、かかっていたんだね。」

「では、念のためにおじさまにお聞きいたしますけれど、たとえばあたいを売ってくれという人が現われて来たら、おじさまはお売りになるかしら。」

「売らないな、こんないい金魚はいないからな。」

「耳の穴のお掃除もするし、お使いにも行くし、何でもしているんですもの、売られてはたまらないわ、でも何万円とかいう大金を出す人がいたら、きつと、お売りになるでしょう。」

「何万円も出すばかはいないし、第一、人間のまねをする金魚なんて何処を捜してもいないよ。」

「じゃ、あの女におあげになったケースの中にあつたお金ね、あれだけ、あたいにも、くださらない。」

「あれは偶然にそうなったんだが、いま更めてそう切り出されると、ごつんとつか聞えてくるね、こだわりが感じられてすらすらと出せない。」

「知らぬ人にお金をあげていて、あたいに、ぐずぐず言つてくださらないなんて、そんな法ないわ。」

「その内に出してよいものなら、出すことにする。」

「一たい、あのケースに幾ら入っていたの、あたい、それと同じくらいのお金戴きたいわ。」

「同じくらいなんて莫迦言いなさんな。」

「だから幾らあつたのか、それを言つてよ。」

「よく覚えていないね、ねじこんで入れて置いたんだからね。」

「自分のお金の高が判らないなんて、そんな鈍間のろまなおじさまじゃないでしょう、はつきり正直にいうものよ、指これだけはいつていたんでしよう。」

「そんなにはいるもんか、二つ折りにしてあつたんだから。」

「じゃ、これだけ？」

「それも当らないよ、まあ、二本くらいが精々せいせいなんだ。」

「嘘おつしやい、ほら、また曖昧な眼附をして、お外らしになつた、ちやんと、どんな時どんな顔をなさるかつていう事、毎日研究しているから解るのよ、これだけは確かにあつた、……」

「それほどはなかつた。」

「うそつき、あんな女にお金やつて、あたいにちよつぱりしかくれないなんで、ごま化そうとしたつてだめよ、同額でなきや承知しないから、正直にお出しになるがいいわ。」

「きようは外に金は持つていない。」

「出掛けに社の方が持つていらしたお金ある筈よ、まだ、状袋にはいったまんなのお金だわ、お出しにならなかつたら、からだじゆう調べるわよ、怖いでしょう、さあ、いい子だから、お手々あげてお襦袢じゆばんにポケットがついていて、そこにちやんとお金はいつている筈よ、ほら、ご覧なさい、こんなにずしりと状袋が重いくらいだわ、これ、みんな戴いとくわ、そしたらあの人にあげたお金のことなんか、もう言い出さないから、いい気味ね、ベソを搔いたみたいな顔をしているわ、あたい、これで先刻から詰っていたものが、ぐつと一ぺんに下がつちやつた。」

「夕食はきみが払うんだよ、」

「いいわ、奢おごつてあげるから何でも。」

「金魚でも女という名がつくと、なまずのような顔をする。」

「おじさまは懲らしめることの出来ない人間だから、うんと懲らしてあげるのよ、あたい、つねづね、なまずにもなつて見たいし、ぬらぬらした鰻うなぎにもなつて見たかったのよ、変つたお魚さかなを見るとすぐその真似まねがして見たくなる、一生びかぴかした金魚になり澄ましているのは、意気地がないし退屈で窮屈なんだもの。しまいに、くじらにでもなつて、海のまんな中でお昼寝してみたいわ。そしたらね、おじさまを背中にちよこんと乗つけてあげるわ

よ、泳げないおじさまはあたいの背中から、逃げ出すことが出来ないもの、何処へも、あの女のそばにも行けなくなつて、背中で死んでおしまいになるかも判らないわ、でも、お背中で亡くなつてくださつたほうが、あたいには気がらくで、とても嬉しいわ。」

「昨夜の運転手さんには、あたいも、まいっっちゃつた。そんな娘か孫のような若い女と一緒になら、料金の倍くらいはお払いになつたつていいじゃないかと、ゆすられちゃつた。それをおじさまつたら、それもそうだ、君から見れば倍額の請求は当然だとか言つて、お払いになつたじゃないの。」

「あの時は僕の心はおちついていて、何を言われようがそれがちつとも、腹に応えないで、相手の心をそのままにして置きたかつたのだ。僕には不思議にそんな氣のする時があるんだよ。」

「でも、さすがに温和しくお払いになつた後で、運転手が言つたつけ、どうも、つい独り身なもんですから、ご無理を申し上げましてと言つて謝つていたわね、きつとお払いにならないと思つて厭がらせのつもりだつたのね。」

「あの時にきみはひと言もいわなかつたのは、よかつたね。にこにこして面白い事がはじ

まったという顔つきでいたのは、よい家庭に育ったお嬢さんみたいだったな。」

「あたいもそんな気がしていたわ、どうせ、おじさまはお払いになるんでしようし、年もたいへん違うことも実際ですからだまっていたの、そしてね、あたい、あれほど人間なみに見られたことも、生れて初めてだったのよ、あたいも、えらくなつたとそう思っただけいだわ。だってあたい達の仲間はみんな酷い飼われ方をされているんですもの。」

「どうして金魚はみんながつがお腹が空いているの。どの金魚もまたたきもしないで、空と餌ばかりさがし廻っているじゃないか。」

「一日餌をやっていて二日わすれている人達に、あたい達は飼われているんですもの、何時だってお腹が空いてひよろひよろしているわけだわ、だから、眼ばかりつン出てしまっているの、世界じゅうで一等酷い目にあっているのは、人間じゃなくてあたい達の仲間だわ、岩と岩の間に通路をこさえてあって、そこを泳ぐのが人間には面白い見物みものらしく、無理にがじがじした岩の中を歩かせるんだもの、尾も鱗も剥がれてしまう。」

「きのうも死んだ金魚が道ばたに、何尾も干からびて捨てられてあつた。」

「おとといも、あたいも、眼の動かない金魚を一尾見たわ。生きている間も碌々食わさないで、死んだら道路におっぽり出すなんて酷い仕打だわね、お腹に砂金があると亜米利加アメリカ

の或る学者が、まんまとかついで見たけれど、あれはアマゾンのまむしみたいなお魚だったのね。」

「きみは大学では、何をやっていったんだ。」

「知れているじゃないの、編物と、それから美容術と、魚介の歴史と、それくらいなものよ、おじさまもいい質問をしてくださるわね、きみは大学で何をやったなんて他人が聞いたら、本物だと思うじゃないの。」

「そのつもりで用心ぶかく言っているんだ、僕はね、何時でも男だから女の事を考えてばかりいるが、女の方では、男の事なんか些つとも考えていないと思っていたんだ、実際はそうじゃなかったんだね。」

「それはこういう事なのよ、女も男と同じくらいに、五対五の比率でいち日男の事ばかり考えているのよ、男の方からいうと、男ばかりが女の事をたくさん考えていると思うでしょう、実際は半分半分なのよ、朝ね、お顔を洗ってお化粧をしているでしょう、あの時だつて男のことを一杯に考えているのよ、散歩とか食事とかを一人でするときにも、やつぱり男以外のことなんか考えていないわ、尾籠びろうなはなしですけど、ご不浄の中にいる時だつて、やはりそれを考えつづけているのよ。」

「どうして廁かわやの中で考える事がきちんと何時も撈はかどるんだらうね、廁で考えた事は、何時も正確で後悔はない。」

「それから一つ、お夕方に勝手に勝手でお茶碗やお皿を洗っている時があるでしょう、せとものがかちかち触れて鳴るでしょう、そしてその水をつかう音とせともの音が、突然、静まって音がしなくなり、しんとして来る時が不意にあるでしょう。」

「あるね、」

「あの時にね、どうして手を休めなければならぬか、ご存じなの。」

「知らない。」

「つまり女が男について或る考えに、突然、取り憑つかれてしまつて手が動かなくなるのよ、ほんの少時といつても瞬間的なものだけれど、どうにも、身うごきの出来ないくらいに考え事が、心も身もしばりつけて来る瞬間があるのよ、あんな怖い鋭い時間ないわ、予感なぞがないくせに突然やつてくるのよ、前後の考えに關係なく、不幸とか幸福のどちら側においても、そいつがやつて来たら動けなくなるわ、内容は種いろいろ々あるけど、はつきりと分けて見ることは出来ないけど、それがやつて来たら見事にしばらくその物が往つてしまふまで、睨にらんでいても、見過みごすよりほかはないのよ。」

「男にもその茫然自失の時がある、厠の中なんかでそいつに、取っ憑かれると放してくれない奴がいる。」

「名状すべからざるものだわね。」

「まさにそうだな、名状すべからざるものだ。つまり名状とまでゆかないなまなま生々したものだ。きみはそんな時どうする。」

「あたい、じつとしているわ、その考え事がすうと通りすぎるまで待つより外ないわ、来ることも早い、去ってしまうのも、とても素早い奴なのよ。」

「それ何だか判るか。」

「きょうという日が、あたいならあたいの中に生きている証拠なんでしょう。」

「そう言うより外に、言いようがないね、」

「それは嬉しいような場合がすくないわね、嬉しい事というものはそんなふうには、来ないものね、嬉しくないこと、つまり悩むということからはからだの全部にとり憑いてくるわね。」

「そろそろきみの飯どきだ、時計が鳴ったぞ。」

「ヘンデルの四拍子ね、ウエストミンスター寺院のかねの音いろって、あまくてあたいに

は、恰度ねむり薬みたいに宜く効くわ。」

「外まで鳴ると、聴えるか。」

「え、お池のうえに寝しずまると、じゃんじやんと聴えてまいります。おやすみと言うようにも、また、合唱をしているようにも聴えて来ます。」

「きみは晩には水にかえつてゆくが、かえつて往くことを何時だつてわすれたことがないね。」

「そしたら死ぬもの。」

「きみを何とか小説にかいて見たいんだが、あげく挙句の果にはオトギバナシになって了いそうだ、これはきみという材料がいけなかつたのだね、書いても何にもならないことを書いて来たのが、まちがいの元なのだ、おじさんの年になつても未だこんな大きい間ちがいを起すんだからね、うかうかと小説というものも書けないわけだ、何の某がどうしたああしたとか、不二子さんとか令子さんがああしたこうしたとも、もう極りが悪くて書けないし、いよいよ、おじさんの小説もこんどこそお終いになつたかな。金魚と揉み合つてのたれ死じにか。」

「はたき尽してあるだけ書いておしまいになつたから、あたいを口説いたんじやないこと、

誰もほかの女に持つてゆくには、あまりにお年がとりすぎているから、けんそんなあたいを口説いて見たわけなのよ、そしたら金魚のくせに神通自在で、ひよっとしたら人間よりかなお知る事は知っていると来たのでしよう。で、書くことの狙いが外れちゃった訳でしよう。」

「はかないね、小説家の末路というものははかない、いま恰度、其処を何も知らずに、僕は帽子をかむつて、てくてくほつ附き廻っているようなもんだ。」

「はかないという口くせで、きょうまでやっていらつしたんじゃないの、だから、後は仕方がないからそのはかないことばかり書くのよ、はかない人間がはかない事を書くのは当り前のことだわよ、金魚の事は金魚のことしかかけないし、人間は人間のことしか書けないのよ。」

「よし判った、ではゆつくりお休み。」

「おやすみなさいまし、明日また。」

「今夜はおじさんと寝ないんだね。」

「きょうはくたびれちゃって、おじさまを喜ばせるだけの体力が、あたいに、なくなっているのよ。」

「小さいからね、では、勢よく、どぶんとお池に飛びこめ、」

「どぶんと飛びこむわ、一、二、三、と、あ、わすれた、明日は理髪店とこやに行く日なのよ、お忘れにならないで、……」

「有難う、ちんぴら。」

「よいしょ、どぶん、……と、お池の神さま待ち兼ねや。」

「日がみじかくなつたわね、四時半というのに、もう暗いわ。だんだん寒くなつたらどうしましょう、お縁側に入れていただかなくちゃ、池が氷つたら、あたい、死んじまう。」

「硝子の鉢に入れて日向に置いてあげよう。」

「硝子の鉢はね、四方から見られるから羞かしいわ、あたい、何時でも裸なんだし、みんな見られてしまうもの。」

「じゃ別の鉢に入れよう。」

「え、そうして頂戴。あら、誰かが呼鈴を押ししたわ、お客さまよ、いま頃、誰方でしょう、もうお夕食の時間なのに。呼鈴もたった一つきりしか鳴らない遠慮深いところからみると、女の方らしいわ。」

「困るな、もう飯だし、……」

「出て見るわ。いらっしやいまし、誰方様でしょうか。」

「ちよつと、お宅の前を通りあわせたものでございますからつい。」

「あの、ご用向きは何でしょうか、ただ今からお夕食をとることになっているんですが。」

「用事などはございませぬけど、ただ、ちよつとお会いできたらと思ひまして、あの、変なことをおたずねするようでございますが、あなたさまは、奥さまでいらっしやいますか。」

「いいえ。」

「お嬢さまでしょうか。」

「いいえ。」

「ではお手伝いの方なんでしょうか。」

「いいえ。」

「秘書のようなお仕事をなすつていらっしやるんですか。」

「そうね、あたいにも宜くわからないんですけれど、秘書みたいな役なんでしょうね、おじさまの事は何でもしてお上げしていて、それで、おじさまがお喜びになれば嬉しいんで

すもの。」

「おじさまなどと、平常おつしやつてらつしやるんですか。」

「ええ、おじさま、おじさまと申しあげていますわ、併しあなたさまは誰方なんでしょう。ちつとも先刻からご自分のことは、仰有らないじやありませんか。」

「わたくしはあなたを見たので名前も何もいう気がしなくなりました。お可愛いあなたがいらつしつては、お会いしてもくださるまいし、おあいしても、帰れと仰有るかも判りません。」

「変なことを仰有るわね、それでは、おじさまのむかしの方でいらつしやるんですか。」

「もうだいぶ前に亡くなっている女なんですから、お訪ねしてもむだだとは思いましたけれど、女のはかなさで、ついお立寄りしたのでございます。」

「と、仰有いますと、あなたはゆうれいの方なのね。」

「ええ、ゆうれいなのでございます。」

「おじさまはどうしてゆうれいのお友達が、こんなに沢山おありなんでしょうか、も一人のゆうれいは講演会にまでいらつしたんですが、まるで本物そっくりに作られています。あなただつてこう見たところは、間違いない本物の女の方かたに見えるんですもの。この

ごろゆうれいごっこが流行るのかしら。」

「あなただって、それ、そんなに、巧くお上手に化けていらつしやる。」

「まあ失礼ね、でも、驚いちやつた、今まであたいの化けの皮をはいだ人は一人しかいなかったのに、あんたは一見、すぐ剥いでおしまいになったわね、どういふところでお判りになります、……」

「言葉づかいの甘つたれ工合でも判るし、第一、人間はそんなに絶え間なくブルブルと顫えてはいしません、ちつとも、おちついていらつしやらない。」

「これから気をつけるわ、あたね、毎日、もう寒くてふるふるしているんですもの、でも、あなたの化け方は巧いわね、それに煙草でも喫んでお見せになったら、にせ物だとは誰も気附かないわ。」

「先刻ね、何でもおじさまの事はしてお上げすると、仰有つたわね。」

「ええ、言つたわ。だから、外の方には一さい何もして貰いたくないんです。あんただつてお通しすれば、何をなさるか判りはしない。」

「じゃ、お通ししてくださらないのね。」

「ええ、まあね、かんにんして戴くより外はないわ、お送りがたわら、そこらまで歩きま

しょうか。」

「どうしてお取次してくださるのが、おいやなんですか。」

「いやだわ、もう、寒くなるとあたいは、からだの自由が利かなくなるんですもの、あたいがいなくなったら、毎日でもいらつしやい、その前にゆうれいだということをおじさまにそう言つて置きます。京都の病院で手術して死んだ方だと申し上げて置くわ。」

「あの時にも、手紙一本下さらなかつた。」

「だつてあんたは外の方と朝鮮まで、かけ落ちまでなすつたのでしよう。おじさまを打ちやらかしておいてね、そして四十年振りに手紙をくれと仰有るのは、無理だわよ、書くにも、書きようもなかつたらしいんですもの。」

「あの時は手術後で、わたくしは弱つて死にかけていました、そんな時妙なもので不意にあの方の手紙が読みたくなつたのです。生きた人間の書いた字というものが人間の死際にも、きゆうに見たくなつて来る時がございすもの。むかし沢山いただいた手紙に、まだ洩れて^もいる何枚かがあるような気がして、それを書いていただきたかつたの、そしてまだわたくしという者がその中にほんのちよつぱりでも、のこつていたらそれを読んで死にたかつたんです、わたくしは毎日の注射でいのちをつないで、お手紙ばかり待つていました、

二日生き三日生き、そしてお手紙を待っていたんですもの。」

「それがとうとう最期まで来なかったのね、あんなに女にあまりおじさまがそんな薄情なことが、平気でしていられるのかしら、想像も出来ないわ。」

「それはわたくしの仕打があまり悪かったからでしょう、恰度、わたくしが結婚する二日前におあいしたときにも、黙ってかくしていました。そして二日後には、もう逃げるようにして結婚して了ったんです。」

「騙し打ちだわね、そりやあんまり酷いわ。」

「口に出してはいえないことだし、とうとうそんなふうになって了ったのです、お会いして今言おうか、ちよつと後で言おうかと迷いながら、ずるずるに言うことが出来なかつたんです。」

「おじさまの怒りが四十何年の後にも、まだ、いま怒ったばかりのようになまなましいのは、あたいによくわかるわよ、それはあなたのやり方が余りに悪いのよ、それでいて今頃お会いしたいなんて宜い気なものね、いくら死んでいたって、取次いであげないわよ。」

「けれどわたくし、未だあの方が怒っていらっしやるという気持に、^{すが}縋って見たい気がしているんです。そこにまだあの方がわたくしに残していらっしやるものが、消えない証拠

があるんじゃないんでしょうか。」

「誰が騙し打ちをした人に気があるものですか、縫られて堪ったものじゃないわ。」

「お愼りになったわね、わたくし、正直に申し上げただけけれど。」

「愼るも愼らないも、ないわよ、何のために今どきうろうろ出ていらっしやるの、あたいのいる間、いくらいらっしったって、何時だって会わせて上げるもんですか。」

「だからその訳をいつてゆつくり一度はあやまつて見たいと、そればかり考えて、うかがつて見たんです。」

「いまから幾ら謝りになつても、受けた痕きずあとがそんなに簡単に治るもんですか、あやまるなんて言葉はどうに、通用しなくなっているわよ。」

「怖い方ね、見かけによらない方。」

「おじさまは莫迦でいて女好きだから、あ、よしよしと仰有るかも知れないが、あたいの眼をくぐろうとしたって、一步もお庭の中にも入れはしない。」

「では、帰ることにします。やはり来るんじゃないか。訪ねても何にもならない事は、気のせいかな、判っていたんだけれど、」

「つい来たくなつたというのでしよう、本物のお化けなら門からふうわりと飛んで往つて、

おじさまのお書齋に行つたらいいでしょうに、そんな勇敢なまねも出来ないくせに、」

「そうよ、そんな勇氣なんか微塵もないのよ、ただ、しよげて帰るだけですわ。」

「早くかえつてよ、門の前では人が立ち停つて見るし、この上、困らされてはとても迷惑
千万だわ。」

「では、また、ご機嫌の好い時にうかがうわ。」

「二度といらつしやらないでよ、何てぬけぬけした化け者でしょう。あんな女と若い時に
つきあつたおじさまだつて、おつちよこちよい極まるわ。一遍、男を振つて置いて、自分
で逢いたい時には化けて出るなんて、都合の好い化け者もこの世の中にはいるもんだナ、
あばよ、一昨日^{おととい}お出でだ。」

「どうしたの、永々と話をしていて、此方にちつとも、お客さまの案内もしないじゃない
か。」

「やつと帰つて行つたわ、お目にかかりたいといつたから、いま、お食事がはじまるんだ
からつて、お断りしたわ、それでいいんでしょう。」

「どんな顔をしているか見たかつたね、四十五年も会わない人なんだ。」

「役者みたい白い顔をしていらつした。むかしのまんまのお顔らしいわ。手術の後では、よほど、お逢いしたいふうな話だつたけれど、おじさまをたすけなかつた人は、こんどは、此方で見事に手厳しく振つてやつたわ。」

「あの頃のおじさんはね、とても、正気の娘さんではつきあつてくれない男だつたんだよ、つきあう方がどうかしている、拙い顔をしているし、生意気だし、なりふりだつて破落戸ゴロツキみたいだし、お金はないしね、そんな奴に相手になる女なんて一人もいはしなかつたんだよ。」

「だつて女の人に眼がなかつたとも、言えばいえるわよ、幾ら穢きたない恰好きつぱうしていたつて若さが物言うじやないの。若い男つてどんな不恰好な顔をしていらしても、皮膚はびいんと張つていて、それだけでも、一生のうちで一等美しい時なんだもの。」

「ところがキミ、僕ときたら、若い時分からジジイみたいな半老ケはんらけの面つらをしていたんだ、いくら剃つても髭はぎしぎし生えるし、毎日お湯にはいっても顔はきれいなならない、僕はね、その時分流行つていたカイゼル型の髭を生やしていたが、この髭ときたら、その頃の写真を見ただけでも、ぞつとしてくるね、何しろ生やし際はまだ薄いもんだから、ひそかに墨を刷っていたこともあるんだ。」

「あら、可笑しい、お髭を生やしていらっしたら、どんなお顔になるか、想像も出来ないわ、大体に於て人相好くないわね。」

「暴力団か、ゆすりの類だね。」

「でも墨をいれていたのは、ちよつと、哀しいじゃないの。」

「あさましい限りさ、それにお金は一文もないと来たら、どんな娘さんだつて寄り付きはしない。」

「おじさまも、そんな時があつたのかな、すべからく、人は勉強して成人すべきだわね。」

「生意氣いうな、だから、きょうの人、ちよつとくらい通してもよかつたね、あれでも、

おじさんの家にも来てくれたし、僕も訪ねて行つたが、何時でも帰りぎわには、手、手と玄関のくらがり、お母さんに見られないように握手をしてくれたもんだよ。」

「握手がそんなに重大な意味があつたの。」

「握手がいまのキスみたいに、効果があつた時勢だつたんだ。」

「そお、それなら、少時しばらくでも、お通しすれば宜かつたわね、あたい、おじさまを振つた女だと思つと、無性にかつとしちやつて、おじさまに会わせてやるものかという、気が苛い立つて来ていたんですもの。」

「きみはすぐかつとするね。」

「燃える金魚というけれど、ほんとに温和しくみえても、すぐ、ほねの中までかつと燃えて来るんだもの、でも、あたいにね、あなたは奥さまでいらつしやいますか、それともお嬢様なんですかとお聞きになったわ、あたい、つい赧くなつちやつたけれど、ここだと思つて落着いて、秘書だと言つてやつた。」

「うまく化けたね、さあ、飯を食おう。」

「あたいね、何時も塩気のないものは厭なのよ、もつとおいしい物がたべたいの。たとえば、髪の毛みたいな、みじん子みみずね、あれをそろそろと食べてみたいのよ、たまにおじさま、溝に行つてすくつて来てちようだいよ。」

「きたない話をしなさんな。溝にしやがんでこの年になつてき、みじん子がすくえるものか、考えてもごらん。」

「そいでなきや羽根のある小さい虫が食べたいわ、蚊みたいな※^{ふよ}みみたいな、ぴかぴかした羽根がおいしいのよ、舌のうえにへばりつくのがとても可愛くておいしい。」

「それ、何のまねをしているんだ。」

「これ、あたいのヒミツの遊びなのよ、こうやつて藻を一杯あつめてまん円くして、その

中からだごとすぼつとはいりこむのよ、眼の中がすっかり青くなっちゃって、硝子の中にいるみたいに、とても宜い気分なのよ、この中でヒミツをひらく。」

「どういふヒミツなんだ。」

「あたいだつてもともと女でしょう、子を生むまねもして見たいじゃないの。」

「あ、そうか。」

「はやく子どもが生みたいんだけど、もう、こんなに寒くなっちゃったから、生めそうもないわ、だから子を生むまねをして、遊ぶだけは藻の中でも遊んでみたいわ。」

「うれしそうだね。」

「卵をうんと産んでそれを毎日解らなくなるまで数えて見て、そしてその卵からだを擦り寄せている気持つたらないわ。」

「金魚の子は可愛いね、きみのように大きくなると、憎たらしいところが出てくるけれど。」

「でも、あたいくらいにならないと、おじさまのお対手になれないじゃないの。あんまり小ちやいと眼の穴の中にでも落つこちそうなんだもの、人間つてとても大きいからナ、口のそばなんか危くて近寄れないもの、人間つて何故そんなにばかばかしく、大きいからだ体をし

ているんでしょうか。」

「これでも未だ僕は小さい方だよ、中には西洋人なぞ、二米メートルもある奴がいるよ。」

「あたいなぞ人間の親指くらいしか、ないわね。」

「きみから見たら図体が大きいんで、いくら驚いても驚き足りないだろうね。」

「おじさま、そろそろ今年の最後の虫を捕りに行きましようよ、こおろぎなら、まだ、そこらに沢山鳴いているわ。」

「明日の晩行こう、昼間にきみが籠を買って置いてくれば、何時でも出掛けられる。」

「去年のこおろぎの眼ん玉なんか、すきすきになっていたわね、まるで石炭がらみたいになっけていても、まだ、生きているんだもの。」

「人間はそうはゆかない。」

「あたいだつていまに尾も鱭ひれも、擦り切れちやつて、おしまいには、眼ん眼も見えなくなるでしょうね、それでも、生きていられるかしら。」

「さあね、」

「あたい、何時死んだつて構わないけど、あたいが死んだら、おじさまは別の美しい金魚をまたお買いになります？　とうから気になつていて、それをお聞きしようと思つていた

「ただけれど。」

「もう飼わないね、金魚は一生、君だけにして置こう。」

「嬉しい、それ聞いてたすかった、あたい、それではればれして来たわ。何処にも、あたのような良い金魚はいないわよ、お判りになる、おじさま。」

四、いくつもある橋

「この頃、小母おぼさまは些つとも、お歩きにならなくなったわね。」

「立って歩くのが大儀らしい。膝ひざばかりで歩いている。」

「あたいね、昨夜ゆうべ考えてみたんだけど、膝ひざぶくろを作つて膝にあてたら、どうかと思うの、でないとい間には、膝の皮が擦り剥むけて了うわよ。」

「膝ひざぶくろを着つけてもいいんだけど、よく、ほら、街なんか足なえの乞食あつがいるだろう、あの人達がね、膝の頭に袋を嵌はめているのを思い出して厭あつなんだ。ぼろ布あつの厚あつぽつた奴やつをくつ附つけているのを見ると悲あつしくなる。」

「あたいも、そいを考えて見て、たまんなかった。歩けなくなつてから何年におなりにな

るの。」

「そうね、十九年になるかな。」

「十九年めに小母さまのお部屋がやっと、出来たわけなのね。」

「橋の上には何時でも乞食がくそのように坐っていて、足も腰も立たないんだ。僕は毎日家で見るとような光景が、橋の上にあるような気がして通りすぎるんだが、それも、田舎にある橋なぞではなくて、東京のまん中で見る橋なんだ、たとえば昔の数寄屋橋という橋はたまらなかつた。」

「あそこに、お乞食こもさんがいたの。」

「お天気さえ好ければ、きつといた、或る日は男、或る日は女というふうに、どれも足のきかない人達がいたんだ、そしてこのごろは橋はないが、通るたびに眼に橋が見えて来て僕が彼処に坐り、また、僕の妻も、僕と交替に彼処に出ているような気がして、あの橋があそこを通るたびに見えて来る、そして新橋の方に夕雲がぎらついて、街は暮れかけていても、橋の上だけが明るく浮いて見えている。」

「おじさまったら、そんなふうになんか小説ばかり頭ん中で書いていらつしやるのね。だって小母様が橋の上にお坐りになるなんてこと、ありえないことじゃないの。」

「人間は誰だつて彼処にいちどは、坐つて見る頭の向きがある。そうでなかつたら、仕合せというものを認めることが出来ない訳だ。僕もあそこに何時だつて坐つて見るかくごはある。戦争中はみんな彼処に坐つていたようなもんだ。」

「じゃ、あたいは下水に流されてゆくのね。」

「きみは下水のお歯黒溝であぶあぶしているし、僕は橋の上で一銭呉れというふうに、一日呶鳴つているようなもんだ。」

「おじさまは仕合せすぎると、ぜいたくしたくなくなつて、お乞食さんのまねまでしたくなるのね。いやなくせね。」

「それを真向からいえるということも、ふてぶてしくて好いじゃないか。」

「橋というものは渡れば渡るほど、先には、もっと長いのがあつたような気がするわね。けど、橋はみじかい程悲しくて、二三步あるくと、すぐ橋でなくなる橋ほど、たまらないものないわね、あたいの池の橋だつて水の中から見上げていると、天までとどいていようだけど、先がもうないわよ。」

「^{マツチ}燐寸箱二つつないだよな橋。」

「その橋の下を威張つてとおるたびに、橋は白つぽく長たらしく、僅かに日光をさえぎつ

たところでは、この頃とても寒くなつて来たわ、水はちぢんで、ちりめん皺しわが寄つて暗いもの、あたい、どうしようかと毎日よくよしているんだけど、おじさまだつて判つてくれないもの。」

「縁側にきみを入れる、用意がちゃんとしてある。」

「そうでもしてくださらなかったら、このままだと水は硬いし重くなるばかりよ。」

「おじさんのお膝においで。」

「ええ、あら、もう大工さんが登りはじめたわね。あたいね、大工さんて、板や四角い木で字を書いている人だとおもうわ。床とこという字を書いているうちに床の間が出来上るし、柱という字を書くために柱はとうに建つてしまふし、大工さんだつて字書きとおなじだわね。」

「紙のようにかんたんに木を折り畳んで、つかっている人なんだ。」

「きようはお二階のほうのお仕事ね。釘袋を下げ、そこに金槌のこぎりを入れ、そして鋸のこぎりを腰にはさんでいて用意がいいわね。何処でも足がさわれば屋根の上までも、登つて行けるのね、おじさまは登れないでしょう。」

「登るにも、眼が廻つて登れない。」

「いい気味ね。あたいはきのう釘箱にあつた一等こまかい釘を、一本盗んでやった。見ているとびかびか光つていて、無性にほしくなつて来るんですもの。」

「何にするの、釘なぞ盗んで。」

「何にもしないけど、ただ、ほしただけなの、ただほしいとだけ思う事あるでしょう。あれなのよ。」

「釘というものは妙にほしくなるもんだね。」

「あたいね、あんなに沢山の材木がどこでどう使われるか判らないけど、もう、何処かに毎日つかわれていて、幾らも残つていないのに驚いちやつた。家を建てるといふことは細かい材木が一杯要るのね。そして何処にどの材木がいるかといふことをちやんと、一々細かい嵌め方も大工さんは知っているのね。一本盗んでやろうと見当をつけて置いた細い木も、何時の間にか、つかつていたわ、盗まなくて宜かつた。」

「すぐ判つて了うよ、どんな小さい木でも、みんな頭に覚えてるからね。」

「おじさま、あれ、目高が池から飛び出しちやつた、危い、危い、ちんぴらのくせに勢い余つて飛び出すやつがあるものか、ほらね、酷かつたでしょう、眼を白黒させているわ。」

「水をいれ過ぎたかな。」

「お池の岸まで、お水をびつたり入れてあるからなのよ、それでは、ちよつとはねて見たくなるのね、おじさまが悪いんだ。」

「この頃目高の数がだいぶ、減つて来たようだ、ひよつとすると。」

「そんなにあたいの顔を、見ないでよ、そんなに食^たべてばかりいはいはしないわよ、疑りぶかく見つめていらつしやる。」

「百尾もいたのに、もう、ばらばらとしかいないじゃないか、総計、五十尾もいない。」

「あたい、食べはしないもの。とても、にがい味がして、頭なぞ目高のくせにかんかん坊主で硬いのよ、食べられはしない、ふふ、でもね、内緒だけど弱っているの、いただくことあるわ。」

「にがいのが美味しいんだろう。」

「うん、かんぞうがにがくてね、とても、わすられない美味しさだわ。」

「そこで一尾ずつ呑みこんだ訳だね、生餌だと、うんこの色も臭いもちがって来るんだ。」

「だんだん薬喰いをして置かなければ、寒さでからだを持たなくなるのよ、あれ食べたあと、からだ中が燃え、眼なんかすぐきらきらして来て、何でもはつきり見えて来るんだもの、おじさま、慍らないでね、時どき、いただかしてよ。」

「可哀そうになあ。」

「だつておじさまは、でかい、牛まで食べておしまいになるでしょう、牛はもうもう鳴きながら毎日屠殺場に、なんにも知らないで曳かれて行くんだもの、目高なんかと^{けた}桁違いだわ、もうもうは、殺されても、まだ、殺されたことを知らないでいるかも判らない、きつと、もうもうは、何時でも、昔の昔から何かの間違いで殺されているとしか考えていやしない。」

「もうもうも可哀そうだが、目高も可哀そうだ。」

「では、^{のんき}暢気に、ぶらりぶらりと歩いてゐる豚はどう。」

「あれもね、何とも言えない、みじめなもんだ。」

「これからは、もうもうも食べないし、ぶうぶうも食べないようにしましょうね、せめて、おじさまだけでも、その気になっていらつしたら、牛も豚も、よく聞いて見ないと判らないけど、うかぶ瀬があるような気がするわ。」

「うむ。」

「とうとう今年はあたい、子供を生もうと願いながら、産む間がなかった。ね、何とかしておじさまの子を生んでみたいわね、あたいなら生んだつていいでしょう、ただ、どうし

たら生めるか、教えていただかなくちや、茫ぼんやりしては生めないわ。」

「はは、きみは大変なことを考え出したね。そんな小さいからだをしていて、僕の子が生めるものかどうか、考えて見てご覧。」

「それがね、あたいは金魚だからよその金魚の子は生めるんだけど、おじさまの子として育てればいいのよ、おじさまはね、毎日大きくなったあたいのお腹を、撫でたりこすったりしてくださいのよ、そのうち、あたい一生懸命おじさまの子だということを、心で決めてしまうのよ、おじさまの顔によく似ますように、毎日おいのりするわよ。」

「そして僕のような凸凹面の金魚の子に化けて生れたら、きみはどうする。」

「おじさまの子なら、似ているに決っている、人間の顔をした珍無類の金魚でございと、触れこんだら慾張りの金魚屋のお爺ちゃんがね、息せき切って買いに来るかもわからないわ。」

「そしたらきみは売る気か。」

「売るもんですか、だいじに、だいじにして育てるわ、みじん子食べさせて育てるわ。」

「みみずのみじん子食うのは、いやだ。」

「じゃ塩鱈しおたらはどう。」

「塩鱈のほうがいいね。」

「金魚の子つてのは、そりやあずきくらいの小ささで、そりや、可愛いわよ、まるでこれがおさかなとは思えない小ささで、尾もひれも頭もあつて泳ぐの。でね、名前をつけなくちゃ。」

「そうか、金太郎とでも、つけますか。」

「もつと立派な名前でなくちや厭、金彦とか何とかいう堂々たる名前のことよ。」

「寛ゆっくり考えて置こう。」

「では、あたい、急いで交尾してまいります、いい子をはらむよう一日じゆう祈っていて頂戴。」

「あ、」

「朱いのがいいんでしょう。金魚は朱いのに限るわよ。黒いのは陰気くさいから、例によつて燃えているたぐま遅いいやつを一尾、つかまえるわ。」

「しくじるな。」

「しくじるもんですか、炎のようなやつと、夕焼の中で燃えて取りくんで来るわよ。」

「おじさま、見てよ、木だの板だの、一つもなくなっちゃった。」

「うむ。」

「どんな小さい板切れも、みんな、つかったのね、覚えをしてあったものをみんな覚えのあるところに、嵌めこんで了っているわ。大工さんは大工さんという生きた機械なのね。」

「こまかいことでは、藤^{ふじ}蔓^{づる}というものがみんな右巻きだということまで、知っているんだ。」

「じゃ豆だの、そいから草の蔓だのは、みんな右巻きになっているの。」

「左巻きはないらしいんだ。木の事では博士みたいな人達だ。」

「おじさま、お二階にあがって見ましょう。」

「上ろう。」

「あたい、今までに、お二階に暇さえあれば上っていたのよ、階段を一段ずつ上るのが面白いのと、それにお二階の畳の上に乗ったと坐っていると、誰も知らない遠い所に来たような気がしていて、ヒミツを感じていたわ、おじさまだつてあたいがお二階にいたことは、^{ちっ}些とも、知らなかったでしょう。」

「知らなかった。」

「お庭の景色がずっと見渡せるし、その景色が大きくふくらがって、拡がって見えて来るのよ、けど、小母様はお二階にはあがれないわね。」

「上つても下りることが出来ないんだ。」

「あたいね、お二階にいと、飛び下りたり、つたつてひさし廂からぶらんこして下りて見たくなる。」

「僕も柱づたいに、つるつると不意に下りて見たい気がする。」

「それに二階というものは、かなしいところなのね、階下したとは世界がちがうし、階下したのことが見えないじゃないの。」

「それは階下したの人はどんなにあせつても、二階のことが見えないと同じもどかしさなんだ、階下したと階上うえとで人間が坐り合つていても、この二人は離ればなれになっているんだ。」

「気が遠くなるような、難かしいお話なのね。」

「その内に二階の人がいなくなれば、それきりで会わずじまいになる、次にまた別の人が来て二階に住んでも、例によつて会わなければ何処の誰だかも、判らないことになるんだ。」

「二階の人は空ばかり見ているが、階下したの人はお部屋にいても、空は見る事が出来ない。」

とおつしやるんでしよう。」

「そうだよ、階下と階上では大きなちがいだ。」

「何だかお話が判らなくなつて来たじやないの、お二階の人はどうして階下の人と、お話ししないのでしよう。」

「二階にいるからなんだ。」

「階下の人は階下にいるからなんでしょうか。」

「そうだよ、幾ら言つても同じことなんだ、問題は階上と階下のことなんだよ。きみなら、ちよろちよろと泳いで階下まで行くが、人間はそうは簡単にゆかない。」

「よしましよう、こんな、めんど臭い彼処此処廻つていようなお話は、幾ら言つてもおなじことなんだもの。」

「同じことじやないよ、大きなちがいだ。」

「まだ言つていらつしやる。それより、もつと吃驚するようなお話してあげましようか、ゆうべね、おじさまのお書斎からかえつて、また、このお二階にあがろうと、階段からあがつて行つて襖をあけますとね、外の明りがさしている中に誰か人がいるじやないの、坐つて、何にもしないで、ほかんと膝のうえに手を乗せているの、あたい、襖をほそ目に

あけてみると、ふっと、その人がゆっくりと此方に顔をお向けになった。」

「きみは何時でも、そんな話ばかり見附けているんだね、僕よか余程へんなところを沢山に持っている。その人は一たい誰だというの、そんな人なんかちつとも僕にはめずらしくない、僕にはいろんな女でも、人でも、何時でもふらふら出会わしているんだ。」

「では、話するのやめるわ、今夜も来るかも知れないから、そつと此処に来ていて見ようか知ら。」

「さあ、日が暮れたから、下りよう。」

「え、階段ですれちがいに上つて来る人がいるかも知れないわ。しかしおじさまには見えはしないわよ、人間の正気にはね。」

「ばかをいうなよ。」

「気をつけてね、すべるわよ。」

「うん、誰も上つて来ないじゃないか。」

「おじさまに、それが判るもんですか。ほら、いま、おじさまはくさめ嚏をなすつた、ぞつとお寒気がしたのでしょう、ほら、ほら、なんだか、すうとしちやつた。」

「何を見ているんだ。」

「お二階に誰かが上ったような気がするもんですから、おじさま、障子はしめていらしたわね。」

「うん、だが、わすれたかも知れない。」

「おじさま。」

「何だ、お腹なんか撫でて。」

「あのね、どうやら、赤ん坊が出来たらしいわよ、お腹の中は卵で一杯だわ、これみな、おじさまの子どもなのね。」

「そんな覚えはないよ、きみが余^よ処^そから仕入れて来たんじゃないか。」

「それはそうだけれど、お約束では、おじさまの子ということになっている筈なのよ、名前もつけてくださったじゃないの。」

「そうだ、僕の子かも知れない。」

「そこで毎日毎晩なでていただいて、愛情をこまやかにそそいでいただくと、そっくり、おじさまの赤ん坊に変ってゆくわよ。」

「どんな金魚と交尾したんだ。」

「眼のでかい、ぶちの帽子をかむっている子、その金魚は言ったわよ、きゆうに、どうし

てこの寒いのに赤ん坊がほしいんだと。だから、あたい、言つてやつたわ、或る人間がほしがっているから生むんだと、その人間はあたいを可愛がっているけど、金魚とはなんにも出来ないから、よその金魚の子でもいいからということになったのよ、だから、あんたは父親のケンリなんかじゃないわ、と言つて置いてやつた。」

「そいつ、慍つたろう。」

「慍つて飛びついて来たから、ぶん殴つてやつた、けど、強くてこんなに尾っぽ食われちやつた。」

「痛むか、裂けたね。」

「だからおじさまの睡で、今夜継いでいただきたいわ、すじがあるから、そこにうまく睡を塗つてペとペとにして、継げば、わけなく継げるのよ。」

「セメダインではだめか。」

「あら、可笑しい、セメダインで継いだら、あたいのからだごと、尾も鰭も、みんなくつついてしまうじゃないの、セメダインは毒なのよ、おじさまの睡にかぎるわ。いまからだつて継げるわ、お夜なべにね。お眼鏡持つて来ましようか。」

「老眼鏡でないと、こまかい尾っぽのすじは判らない。」

「はい、お眼鏡。」

「これは甚だ困難なしごとだ、ペとついていて、まるでつまむ事は出来ないじゃないか。もつと、ひろげるんだ。」

「羞かしいわ、そこ、ひろげるなんて仰有ると、こまるわ。」

「なにが羞かしいんだ、そんな大きい年をしてさ。」

「だって、……」

「なにがだってなんだ、そんなに、すぼめていては、指先につまめないじゃないか。」

「おじさま。」

「何だ赦い顔をして。」

「そこに何かあるか、ご存じないのね。」

「何って何さ？」

「そこはね、あのね、そこはあたいだちのね。」

「きみたちの。」

「あのほら、あのところなのよ、何て判らない方なんだろう。」

「あ、そうか、判った、それは失礼、しかし何も羞かしいことがないじゃないか、みんな

が持っているものなんだし、僕にはちつとも、かんかくがないんだ。」

「へえ、ふしぎね、人間には金魚のあれを見ても、ちつとも、かんかくが生じないの、いやね、まるで聾みたいだわね、あたいだちがあんなに大切に守っている物が、判らないなんて、へえ、まるで嘘みたいね、おじさまは嘘をついていらっしやるんでしょう。シンゾウをどきどきさせている癖に、わざと平気をよそおうているのね。」

「うむ、そういうのも尤もだが、きみだちの間だけで羞かしいことになっていても、僕らには何でもない物なんだよ。」

「人間同士なら、羞かしいの。」

「そりや人間同士なら大変なことなんだよ、お医者でなかったら、そんなところは見られはしない。」

「分らないな、人間同士の間で羞かしがっている物が、金魚の物を見ても、何でもないなんてこと、あたいには全然わかんないナ。」

「金魚は小ちやいだろう、だから、羞かしいところだか何だか、判りっこないんだ。」

「お馬はどうなの。」

「大きすぎて可笑しいくらいさ。」

「じゃ人間同士でなかったら、一さい、羞かしいところも、羞かしいという感覚がないと仰有るのね。」

「人間以外の動物は人間にとつては、ちつとも、感じが触れて来ないんだ、まして金魚なんかまるでそんな物があるかないかも、誰も昔から考えて見たこともないんだ。」

「失礼ね、人間ってあんまり図体が大きすぎるわよ、どうにもならないくらい大きすぎるわ、金魚のように小さくならないか知ら。」

「ならないね。」

「でも、おじさまとキスはしているじゃないの。」

「きみが無理にキスするんだ、キスだか何だか判ったものじゃない。」

「じゃ、永い間、あたいを騙だましていたのね、おじさまは。」

「騙してなんかいるものか、まア型ばかりのキスだったんだね。じゃ、そろそろ、尾っぽの継ぎ張りをやろう。もつと、尾っぽをひろげるんだ。」

「何よ、そんな大声で、ひろげるなんて仰有ると誰かに聴かれてしまうじゃないの。」

「じゃ、そつとひろげるんだよ。」

「これでいい、」

「もつとき、そんなところ見ないから、ひろげて。」

「羞かしいな、これが人間にわかんないなんて、人間にもばかが沢山いるもんだナ、これでいい、……」

「うん、じつとしているんだ。」

「覗いたりなんかしちや、いやよ。あたい、眼をつぶっているわよ。」

「眼をつぶっておいで。」

「おじさまは人間の、見たことがあるの。」

「知らないよそんなこと。」

「じゃ外の金魚の、見たことある。」

「ない。」

「お馬は。」

「ない。」

「くじらというものがいるでしょう、あのくじらの、見たことおありになる。」

「くじらのあれなんてばかばかしい。」

「人間がほかの動物に情愛を感じないなんて、いくら考えても、本当と思えないくらい変

だナ。」

「きみはたとえば鮒ふなとか目高とかをどう思う、目高は小さすぎるし、鮒は色が黒くていやだろう。」

「いやよ、あんな黒ん坊。」

「それじゃ僕らと同じじゃないか。」

「そうかな、目高はちんちくりんで間に合わないし。」

「金魚は金魚同士でなくちや、何なんにも出来はしないよ。」

「そういえばそうね。」

「うまく尾が継げたらしいよ。」

「眼を開けていい。」

「いいよ、尾を張って見たまえ。」

「ありがとう、ぴんと張って来て泳げるようになったわ。おじさまは相当お上手なのね、どうやら、彼処此処のぶちの金魚を騙だまして歩いているんじゃない？ 尾のあつかい方も手馴れていらつしやるし、ふふ、そいからあの、……」

「あ、捉つかまえた、田村のおばさま、きょうは放しませんよ、きょうで三日もいらっしやいるんじゃない？ あたい、ちゃんと時間まで知っっているんだもの。きのうも五時だったわ。」

「ええ、五時だったわね、五時という時間にはふたすじの道があるのよ、一つは昼間のあかりの残っている道のすじ、も一つは、お夕方のはじまる道のすじ。それがずっと向うの方まで続いているのね。」

「そのあいだを見きわめていらっしやるんでしょう、きっと、誰にも見られないように、でも、あたいには、それが見えてくるんですもの。」

「あなたの眼にはとても適かなわないわ。石の塀の上にはいらっしやるのが、遠くからは、朱い球になっついて見えている。」

「潜り戸からおはいりになつてよ、おじさまもいらっしやいます。退屈してぼうつとしているわよ、何時でもお夕食前になんだか、ぼうつとして気味のわるいくらい黙りこくつているわよ、ゆり子おばさまの来ることを知っっているのか知らと思ふことがあるわ。知っついて黙っているのか知ら？」

「些ちども、ご存じがないのよ、お夕方つというのは、誰でもだまっていたい時間なのよ。」

「きのうもおばさまの話をしたけれど、ふんと言ったきり後にはなんにも、言わずじまいよ。だから、あたい、お腹が空いているんだと勘ちがいしたんですけれど、余りおあがりにならないかったわ。」

「ほほ、お腹が空いたなんて面白いこと仰有るわね。」

「まあ、おばさま、変にお笑いになっちゃ厭。どうしてそんな声でお笑いになるの。」

「べつにわたくし変な声でなんか、とくべつに、笑わないんですけれど、……」

「だつて寒気がしてくるわよ。さあ、おはいりになつて。」

「きようはいけないの、お使いのかえりなものですから、すぐ戻らなきゃならないのよ。」

「誰のお使いなのよ、誤魔化したつてだめ。」

「まだお買物があるんですから、それから片づけなくちゃ。」

「じゃ、あたいも一しよにお供するわ。離れないでついてゆくわよ。」

「いらつしやい、あなたのお好きな物、何でも買ってあげるわ。」

「おばさま、じゃ金魚屋に寄つて頂戴、うちの金魚にたべさせる餌を買っていただきたい

の。」

「冬なのに、金魚屋のお店なんかあるかしら。」

「いえ、金魚の問屋のお爺ちゃんの家によければ、何時だつてあるのよ。」

「問屋は何処にあるの。」

「あたい、ちゃんとそれを知っている、マアケツトの裏長屋の二軒目で、おばあちゃんが古綿の打直しをしているんだから、綿打直シの看板を見てゆけばすぐ判るわ、おじいちゃんはそこに冬越しの金魚と一しよに暮しているの。えびを挽いて糠ぬかをまぜた餌を一日作っているわ。」

「行つたことあるんですか。」

「ええ。」

「まあ、羞かしそうに顔をかくそうと、なさるわね。」

「いやよ、そんなに顔ばかり見ちゃ。あたい、あんまり度たび餌を買いにゆくもんだから、お爺ちゃんと仲よしになつちやつたんです。」

「そお、あそこの床の低いお家でしょう、古綿打直シ、ふとん縫いますつて、看板出ているところでしょう。」

「ええ、おばさま黙つててね、あたい、お爺ちゃんとお話しますから。」

「はい、はい。」

「お爺ちゃん、今日は、きようは冬越しの餌を買いにきたのよ、もうすっかりお挽きになったの。」

「おう、三年子、どうしたい、きようはべらぼうに美しい女と一緒にだなあ、おめえも、えらく大きくなって別嬪べっぴんになったもんだ、もうおめえも来年は四年子だ、四年子は化けるというぜ。」

「もつと低声でお話するものよ、あの方に聴えるじゃないの、きようはうんと餌を仕込みに来たのよ、お金はあのおばさまがみんな払ってください。」

「おめえは何時でも金持と一緒にいいなあ、うんと、買ってくれ、冬場は目高一尾だつて売れはしないんだ。」

「じゃ十箱ほどいただくわ。」

「おいおい、三年子、十箱で幾らになると思うんだ、千二百円もするんだぜ。」

「いいわよケケケチしないでよ、田村のおばさまがみな払ってくださいるわ、それに、金魚藻をどつさり包んでね、ほかに、今年のたべおさめに、みみずのみじん子を缶詰の空かんに一杯入れて頂戴、久しくいただかないから、どんなに美味しいでしょう。」

「おめえはみじん子が好きだったな、これはお負まけにしとくよ、けどなあ、三年子、おめえ

のような仕合せな金魚は、この年になるまで未だ一度も見ることがない、永い間この商売をしているけれど、病気もしないで何時もおめかしして歩いているのは、まあおめえくらいなもんだ。」

「美しからざれば人、魚を愛せずだわよ。」

「ときにおめえ、これじゃねえか。」

「ええ、お腹が大きいよ、卵がぎつちり詰っている。お腹がぴかぴかして光っているでしょう。」

「どうだい、おれの家で産んではくれまいか、おめえの子なら、きっと、仕合せの好い子が生れるに決っている。」

「だめ、だめ、先約済みなのよ。」

「どうしてさ。」

「子供をほしがっている人間がいるのよ、だから、冬ぞらだけど、生むことにしたのよ。」

「人間がかい。」

「うん、あたいを大事にしてくれる人がいるの。」

「余程の金魚好きな奴なんだな、じゃ、冬の間はからだに気をつけてな、来年の春また思

い出したら来てくれ。」

「おじいちゃんもお年だから、杖でもついて気をつけてね、あまり焼酎をおあがりになると、お腹が焼けてくるわよ。」

「うん、判った。」

「さよなら、あたいの育ての、二人とない大事なおじいちゃんよ。」

「卵から育てた生きのよい、お化けの三年子よ。」

「あの金魚屋のおじいちゃんは、とても、好いお人でしょう。」

「好い方ね、あなたの何に当る人なの。」

「そうね、しんせきみたいな人か知ら。」

「だってしんせきって変ね、ただの金魚屋さんなんでしょう、何の関係のない方なんでしょう。」

「ええ、それはそうなのよ、けど、こんなお話よろしゅう、それよりお帰りにちよつと寄つて、おじさまにお会いになつて頂戴、でなかつたら、折角いらつしたのに詰んないじゃないの。」

「けど、これから、お買物をしなきゃならないの。」

「じゃ、お買物を先になすつたらどう。」

「ええ、そうね。」

「何をお買いになるんですか。」

「お野菜なんだけれど。」

「そこのお店にはいりましょう。百合根の球があるし、ほうれん草はいらないんですか。」

「もやしがいいわ、それから細葱を少しに黄色い蜜柑。」

「あら、厭だ、もやしをお買いになるの、白っぽくて蛆うじうじ々々していて厭ね。それに細葱ほそねぎ

つて、糸みたいで気味がわるいわ。おばさまは変なものばかりお買いになるのね。」

「あなたは何がいのの。」

「あたいはと、そうね、そうめんにしようか知ら。」

「そうめんて長くて、変に曇曇つていてきらいだわ。」

「冬、たべる物のない時に、たべますのよ。」

「上山さんもおあがりになるんですか。」

「おじさまは長細いものは何でも大嫌い、そうめんでも蛇でも、きらいだわ。」

「蛇でも、」

「ええ、冬は蛇がいなくなるから、いいわね。あゝ、も来ちやつた。ちよつと俵^まつてて、おじさまがいるかどうか見るから。」

「危いじゃないの、塀に登つたりなんかして？　まるで男みたいな方ね。」

「いるいる、また、何時もみたいにぼかんとしている、きつとお腹が空いているのよ、空いている時には、いつも、きつとあんな顔をしている。」

「じゃ、わたくしこれで失礼するわ。」

「何おつしやるのよ、お這入りになる約束じゃないの、きょうは帰しはしないから、幾らでもだだをこねるがいいわ。」

「これから帰つてお食事のしたくもしなければならぬし、お洗濯の取り入れもわすれていたのよ。」

「お食事のしたくつて、誰のしたくをなさるのよ、おばさまは、お一人で暮しているんでしょう。」

「ええ、わたくしの食事のことなのよ。」

「だったら、おじさまと久振りでご一緒にお食事なさるがいいわ。」

「その他にも用事があります。」

「何もご用事なんか、あるもんですか。」

「お洗濯物の取り入れがあるのよ。」

「洗濯物なんかお帰りになつてからでもいいわ、さあ、這入りましょう。」

「ほんとにきようはだめなのよ、急ぐ用事が一杯たまっているんですもの。」

「おばさまのばか。」

「何ですて。」

「ばかだわ、お会いしたくて前をぶらぶらしているくせに、いざとなると、びくびくして避けているじゃないの。そんなに厭だったら、初めっから来ない方がいいのよ。」

「まあ、酷い。」

「何時だつて現われると、すぐ逃げ出してしまいうくせに、何のために現われるのよ、そんなのもう古いわよ。」

「だつてご門の前に、ひとりでに出て来てしまふんだもの。」

「嘘おつしやい、自分で五時という時間まで計つて来ながら、お洗濯物の取り入れも、何も無いもんだ、一緒にきようはお家にはいるんですよ、でなきや、手に噛みついてやるわよ。」

「怖いわね、何とおつしやつても、わたくし帰るわよ。」

「帰すもんですか。」

「手、痛いわ、何てちからがあるんでしよう。」

「噛みついたら、もつと痛いわよ。」

「じゃね、わたくし顔をなおします、だから、あなたの口べにと、クリームを貸して下さい、お池のそばでちよつと化粧を直すわ。」

「その間にずらかるお心算つもりなんでしょう。」

「ずらかるなんて口が悪いわ、そんな人の悪い事はしません、柿の木の下でじつと俵つて
いるわよ、白粉も持って来て頂戴。」

「ええ、だけど心配だ、おばさま、お金のはいつているハンド・バッグをお預りするわ、
ずらからない証拠にね。」

「はい、ハンド・バッグ。」

「じゃ、すぐ急いで取って来るわ、ほんと何処にも行かないでね、おじさまにそう言つと
くから、きょうはじめてお食事するといったわね、あたい、嬉しいわ、おじさまもきつと、
ほくほくなさるわ。」

「これも、ついでに、お料理してね。」

「百合根、いただきますわ、もやしは厭よ。じゃ、すぐ戻るわ。おばさま、もう、白椿が咲いているからお剪きりになつていいわよ、とてもいい匂いだから、俵かっている間にかいいでいらつしやい。」

「ありがとう。」

「くらいから街灯点つけて置くわ。」

「おじさま只今。」

「何処に行つていたんだ、化粧道具なんか持つていま時分何処に行くんだ。」

「いい人が来ていて、おじさまにお会いするために顔をなおすと仰有つていらつしやるのよ、だから、お化粧道具を持つてゆくんです。」

「いい人つて誰なんだ。」

「当てる見てよ、当るかナ、」

「じらさないで言つてごらん。」

「田村ゆり子。」

「いま時分に、どうして君はあの人に会ったのだ。」

「お家の前でおあいして、一緒に買物をしてこれから一緒におじさまと、お食事のお約束したのよ。」

「うむ。」

「いやにれいたんな顔附ね、ご一緒におあがりになるんでしょう。」

「約束なら仕方がないが、いまごろどうしてうろついているんだらう。すぐ逃げ出すくせに。」

「きょうは大丈夫、ハンド・バッグ預っちゃった、何処にも往かないで俟っている証拠なのよ。」

「見せてみたまえ、」

「古い型だわね、二十年も、もっと以前の流行らしいのね、下げ紐ひもがついてないし、口金くしんがみんな錆びさびびついている。こんな古風なバッグ提げひげるの極りわるくないかしら。」

「中を開けてごらん。」

「人様の物を開けるの悪いじゃないの、おじさまらしくないこと仰有るわね。」

「まあちよつと開けて見たまえ。」

「開かないわ、錆びついているのよ、ええ、ぎゅつと振^{ねじ}つて見るわ、やっと開いたけど、手巾とバスの回数券と、それに香水の瓶がはいつているきりよ。」

「バスの回数券があるの、ふうむ。」

「何処かにお勤めになっていらつしたのね。」

「さあ、どうかな。」

「どうして回数券なんか、要るんでしようか。」

「よく見たまえ、この回数券は戦前もずっと前の、藍色^{あいいろ}の表紙じゃないか、あと三枚きりしかない。こんな物いまだき通用するもんかね。」

「あきれた。」

「くわせものだよ、きみが勝手に作り上げたおハナシなんだ。およし、こんな事を企んでおじさんを困らせるのはお止し。」

「だつてあたゐ、実際、田村さんの手をうんと握つて見たもの、講演会の時よりか、ずっとふとつていたわ。」

「庭で俟っているの。」

「そんな約束なのよ、きようは間違ひはないのよ、あたゐ、騙されるのいやだから、先刻

ね、手を痛い程握ったときに髪の毛を二三本噛み切ってやったわ、ほらね、これ、本物の髪なんでしょう。」

「髪だね。」

「でも、人間の髪にまちがないでしょう、つやといい、ウエーヴのかかっている工合と
いい、……」

「ウエーヴがかかっているな、併し古いあとだね、」

「おじさま出て見ましようよ、お迎えしておあげしたらお喜びになるわ、ご門のきわにいらつしやるんです。」

「いや、僕はここにいますよ。」

「ちよつとくらい出たつていいじゃないの、意地悪いわないで、さあ、どっこいしよと、立つのよ、どっこいしよと、……」

「僕は寒気がしているから出ないよ、きみ、往つて連れて来てくれたまえ。」

「出たくないんですか。」

「うん、出たくない。」

「こんなにお頼みしてみても、だめなの。」

「気が重いんだ。」

「冷酷無情な方ね。」

「冷酷でも何でもいいよ。」

「おじさまのバカ、バカヤロ。」

「ばか、だと。」

「バカだわよ、わずかに庭にも出てやらないなんて、そんな酷い仕打ちがあるもんか、二日も三日も遠くから通っている人にさ、ちよつとくらい、出てあげてもいいじゃないの。」

「何とでも言いたまえ、きみが呶鳴つたつて屁でもない。」

「じゃ本物の人間でないと言いたいんでしょう、だから、会う必要はないというのね。」

「よくそこに気がついたね、あれは本物の女ではないんだ、きみが金魚屋に行く途中で田村ゆり子のことを、考えながら歩いて、遂々とうとう、本物に作り上げてしまったのだ。」

「じゃ、何時か街の袋小路の行停まりで見たときも、あたいのせいだと、仰有るの。」

「あの時は僕ときみとが半分ずつ作り合わせて見ていたのだ、だから、すぐ行方不明になつて了つた。人間は頭の中で作り出した女と連れ立っている場合さえある。死んだ女と寝たという人間さえいるんだ。」

「それはユメなのよ。」

「ユメの中で男と逢った女で、孕はらんだ例は沢山にあるんだ。」

「おじさまのバカも無限なバカになりかかっているわね、後生だから庭にだけでも出て見て頂戴。」

「しつこい出目金だ。」

「出目金とはなんです。あたいが出目金ならおじさまは何だい、死に損ったふらふらお爺ちゃんじゃないの、あたい、往つてあんな死に損いなんかに会わないで、帰つていただくようにいわよ。」

「ついでに、もう来ないでくれと言つてくれ。」

「会いたいくせにそれを耐えて、いらいらしてそれでそれが本心だというの、会いたくても飛び出せもしなくせして、意気地なしね、うそつきなのね、両方で同じことを言っているんだ、おばさまはおばさままで逃げ廻っているし、此方は此方で逃げを打つなんて、揃つて人間なんて嘘のつき合いをしているようなものだ。人間なんて生れてから死ぬまで、嘘の吐つき合いをしているようなものだ。」

「死んでいても、まだ嘘をついているかも知れないさ。嘘ほど面白いものはない、」

「じゃ、勝手に嘘をついていらっしやい。あたい、おじさまってもっと女のところが判る方だと思つていたら、ちつとも、判つていない方なのね、こまかい事なんかまるで判つていない、……」

「女のところが判るものか、判らないから小説を書いたり映画を作ったりしているんだ、だが、ぎりぎりまで行つてもやはり判つていない、判ることはおきまりの文句でそれを積みかさねているだけなんだ。」

「もうそんなお話、聴きたくないわ、何時でも同じ事ばかり仰有っている、よく飽かないで言えるわね。」

「言つたことを何時も繰り返して言つては、人間は生きているんだ。」

「あら、誰かがあたいを呼んでいるんじゃないか知ら、黙っていて、ほらね、聴えるでしょう、おばさまが呼んでいるのよ、おじさまにはあのお声が聴えないの。」

「誰の声もしてはいないじゃないか、金魚の空耳という奴だよ。」

「いいえ、すぐ門のわきにいらっしやるんだけれど、それにしても遠い声だわね、ほら、また、きれいな声で呼んでいる。」

「きみはすっかり何かに捲き込まれているね、少し変になっている。」

「おばさま、いま行くわよ、すぐ、行くわよ、おばさま。」

「そんな大声を出すと、家の人みんな吃驚するじゃないか。」

「ほら、お答えになつたわ、はやく、いらつしやいってね、あの声が聴えないなんておじさまこそ、そろそろお耳が遠くなっている証拠だわ。」

「きみに聴えていて僕に聴えない場合だつてある。とにかく、そんな女なんかはもう門の前にも庭の中にも、俟つていはしないよ。」

「薄情なおじさまと違うわよ、ちゃんと俟つていらつしやるから、お約束だもん。」

「早く往つて見たまえ。」

「早く往こうが遅く往こうが、あたいの勝手だわ、おじさまなんか、いやな奴には、もう、構つていらぬ。」

「いよいよ、ふくれて来たね。」

「明日から何もご用事聞いてあげないから、かくごしていらつしやい。威張つたつて碌ろくな小説一つ書けないくせに、ふんだ。」

「あら、おばさまがない、おばさま、何処なのよ、まあ、そんな処に跣か踏がんでいらつし

「つたら、わかんないじゃないの。」

「あなたお一人？」

「おじさまは出て来ないのよ、おばさまがきつとお帰りになっていると、思っているのよ。」

「わたくしもいま、帰ろうとしているところなんです、いろいろ有難う、じゃ、もう帰らしていただくわ。」

「だってそんな、……おじさまは会いたいくせに、わざと、冷然としていらつしやるのよ、あたいたい、喧嘩しちゃった、明日からは一さい合財がっさいご用事してやらないってね。」

「困るわ、わたくしのためにそんなこと言ったりして。」

「何だか本当はお会いするのが怖いらしいのよ、煙草を持っている指先の顫えを見せまいとして、手を動かして誤魔化していたわよ。」

「どうしてでしょう。」

「ときにおばさま、右の手をちよつと見せて。」

「何なの。」

「まあ、まだ腕時計をねじ取ったあとがのこっているわね、この傷痕どうして永い間治ら

ないのでしよう、これ、おじさまの仕業じゃないわね。」

「ちがうわよ、他の別の人、」

「一たい誰なの、お時計盗んだやつ。」

「それはいえませんが、知っている人なんです。」

「きつと、以前おばさまにお時計を買ってくれた人でしょう、その人が訪ねて来た時に、おばさまはとうに死んでいた。そしてその男が出来心だか何だかわかんないけど、力一杯に手頸から時計をもぎ取って逃げ出したのね、おばさまの死んだことなんぞ、よろしどうでも宜かったのね、ただ、時計がきゆうにほしくなったのね。」

「あなたは探偵みたいな方、その男がわたくしの死顔も見ないで、その足で別の女の所に行つて兼ねて約束しておいた時計だと言つて、それをやったのよ、女は嬉しがり男はいい事をしたと思つたのでしよう。」

「その男つておばさまの、好きな人だったの。」

「まあね、引き摺られながらも、いやでも、そうならなければならぬ場合が、わたくしにもあつたんですもの。」

「おじさまは、その方の事を知つていらした？」

「ごぞんじなかつたわ。」

「おばさまはその人の事を隠して、言わなかつたのでしよう、おじさまに厭な思いをさせたくなかつたのね。」

「いえ、わたくしの事は何もお話したことがないし、お尋ねもなさらなかつた……ただ、何時も見られているような気がしていたけれど、また何時もなにも無関心のご様子でもあつたわ。」

「その時計を盗んだ方、憎らしいとお思になる？」

「それほどでもないけど、男という者はみんなそうなのよ。」

「じゃ今頃、何処かの女の手頸にお時計がはめられているのね、いやね、死人の手頸からもぎ取つた時計をはめているなんて、その女の人、おばさまご存じ？」

「一緒にはたらいていた事があつたから、知っているわ、性質のいい人なのよ、だから騙されやすく、騙されるのが嬉しかつたのでしよう、そういう女だつて沢山いるのよ、世間には。」

「騙されていながらそれが嬉しいことになるのか知ら、あたいにはそれがよく判らない。」
「騙されるといふことは、気のつかない間は男に媚びているみたいなものよ、気がつくつと、

がたつと何処かに突き墮おとされた気がしてしまふんです。」

「おばさまも突き墮されたのね。」

「ええ、では、もう暗くなつたから、そろそろ行きましよう、もうこれで再度とお目にかかることもないでしょうから、あなたも寒い冬じゆう気をつけてね。」

「も一度おじさまを呼んで見るわ、あたいの呼ぶのを俟っているかも知れない。」

「呼ばないで頂戴、ね、呼ばないで。」

「ちよつと俟つてよ、ちよつと、些ほんのちよつと俟つて。」

「では、また。」

「おじさま、おばさまが帰るから、すぐ、いらつしつてよ、おじさま。」

「そんな大きな声をなさると、近所のお家に聴えるじやないの、お呼びになるとわたくし足が竦すくんで来て、きゆうに、歩けなくなるんですもの。」

「何しているんでしょう、まだ、何かにこだわつてじつとしているのよ、出て見たくてならないくせに、何時もああなんだ、何をしているんだらう、ね、時計見ていてね、あと五分間俟つて、五分経つたらいらしてもいいわ、拜むから。」

「ええ、では五分、でも、出ていらつしやらないでしょう、こんなわたくしにお会いにな

るわけがないもの。」

「いま出ていらつしやるわ、きつと。あ、五分経つちやった。」

「じゃ、わたくし、……」

「いいわ、お帰りになつてもいいわ。その道まっすぐだとバスの停留場が見えます。あ、それからおばさまのお持ちの回数券は戦争前の藍色券なのよ、あんな物、おつかいにならないからお気をつけてね。」

「ぞんじています。」

「そお、じゃ、どうしてハンド・バッグに入っていたんです。」

「どうしてはいつていたのか、わたくしにも、よく判らないわ。でも、それはそつとして置きたかつたのよ。」

「そちらは反対の道路みちだわよ、其処にはもう人家がない、さびれた裏通りだもの、」

「ええ、」

「あら、其処は焼跡になつていて、街灯も点いてないのよ、道順教えておあげしますから俟つていて、水溜りばかりでとても歩けはしないわ。」

「ええ。」

「俵つていて頂戴、意地悪ね、きゆうにそんな早足になっちゃって、ほら、見なさい、危いわよ、水溜りにはまっちゃったじゃないか、ちよつと立ち停つてよ、一と走りお家に行つて、懐中電灯持つて来ますから。」

「……………」

「俵つてと言っているじゃないの。聴えないのか知ら、振り向きもしないで行っちゃった。」

「……………」

「おばさま、田村のおばさま。暖かくなったら、また、きつと、いらつしやい。春になつても、あたいは死なないでいるから、五時になったら現われていらつしやい、きつと、いらつしやい。」

後記 炎の金魚

「蜜のあわれ」の終りに、燃えながら一きれの彩雲に似たものが、燃え切って光芒だけになり、水平線の彼方にゆつくりと沈下して往くのを私は折々ながめた。こういう嘘自体が沢山の言葉を私に生みつけ、ついに崩れて消えるはれがましさを、払い退けられずにいたのである。七歳の少女が七歳であるための余儀ない遊びならともかく、私はすでに老廃、その廃園にある青みどろの水の中に、まだ盛りあがる囁たわごと言に耳をかたむけていたのである。

私は去年の夏のはじめ、一尾のさかなを買って町を歩いてきた。こんな実際の事が私にありうることでない奇蹟の日を記憶させた位だ。暇のない人間にある不意の暇というもの程、複雑に細かくはたらく時間はない、この日から私はいろいろな言葉を拾いはじめ、実

にばかばかしい多くの囁言にうつつを抜かしていたのである。その間じゆう私はそわそわとして機嫌が好かった。聡明な作家というものはこんな駄じゃれや回顧を、何時も蹴飛ばして立派やかな材料と、つねに四つに取り組むのが本来の仕事なのである。危あぶなげ気のある仕事には作家は親しまないものだ。だが、不倖にも私の中にあるインチキは、遂にいろいろな巧みな完成を為し遂げようとしても、それはただの魚介を仮象としてごてつくばかりの世界に、ふらふら不用意にも迷い込んでいたのである。

私は嘗て詩を書いて売り飛ばしていた男であり、いまも古い詩をたのまれると臆面もなく書いている詩人くずれの男であった。だが感心なことには数百篇をこえる小説物語の中には、嘗て詩をはさみ込んだ例は二度くらいしかない、小説の構成のうえで詩を書きいれることは、物語にたるみを生じるし、詩の印刷の頭が低いから其処にある隙間が、或る場合には小説の行列をこわしてうおそれがあるからだ。だから私はずっとそれを避けていた。数行の詩の挿入ですらそうであるのに、この物語に詩を匂わそうという意図は全然なかった。寧ろ詩の感応や漂泊があやまって現われそうであった時には、私はそれを現実に引き戻して極端に回避していたのである。

では、この物語は一体何を書こうとしたのか、という問題はこれを書き終えてからも、

私にあやふやな多くのまよいを与えた。読んだら判るじやないかと、そう言つて了えばそれまでだが、私自身にも何が何だか判らないのである。ただ、このような物語の持つ美しさというものは、どの人間の心にも何時もただようている種類のものであつて、それは特定の現身ではないのだけれど、どの人間にもふかく嵌り込んでいる妙な物なのである。或る一少女を作りあげた上に、この狡いずる作者はいろいろな人間をとらえて来て面接させたという幼稚な小細工なのだ、これ以上に正直な答えは私には出来ない。

先にも述べたように、一尾のさかなが水平線に落下しながらも燃え、燃えながら死を遂げることを詳しく書いて見たかつた。つまり主要の生きものの死を書きたかつたのだが、そんな些事を描いても私だけがよい気になるだけで、誰も面白くも可笑しくもなかうと思つて止めた。小説家という者はつねに好い気な人間であつて、時に屢々しばしばこれは面白いと勘違いをして冗くだらない事を長々と書く誤あやまちを何時も繰り返して、それにとつ掴まると、まんまとやり損うのである。

たとえば今日は気分が大変に悪い、どうにも、めまいがして遊泳の平均した姿勢を失つていると彼女は言い、私はすでに紅鱗に褪色のある彼女を見て、どこかが悪いというより、これはもはや此のさかなの死期が来ていると思つた。泳ごうとしながらきりきり舞いをし、

少し泳いではばったりと泳ぎ停まり、腹を横にしてそのままにいるすがたを見たが、また、再び背^{せびれ}鰭を立てようとして焦つても、その事はもう為し得なかつたのである。嘗てあなたは若しわたしが死んだら、その日から水ばかり眺めていらつしやるでしょうと彼女は言つたが、それは、そのような日が近づいていることが感じられ、よく見ると水には生氣のない重いよたよたした波が、彼女の周囲に鉛色の空を映して取りまいていた。もつとよく注意してみると、もはやお喋りも、顔をつくろうという動いたものが見られなかつたのだ、そこで勿論私は話しかけるとか、声で呼ぶとかをしなかつた。あなたは死際の誰にでも冷淡でいらつしやる、それが老いた人間の習性だということ、私は彼女から聴いた覚えを思い返した。或る未亡人に私は或る日ふと言つたことがあつた。あなたは毎月のように友人のお通夜に行つたり告別式に詣つたりしているが、他人の死にはちつとも心を動かさなくおなりでしょうというと、そうです、わたくしは人が死んだその悲しみなどと対い合つていても、夫の死ですつかり悲しみははたいて了つていて、何もいまは残っていませんという返事であつた。私はそれも、もつともの事に思つた。夫の死に行き会つた人は、人間の死の最悪の時期を経験しているから、いかなる悲しみもそれ以上に參ることはあるまいからだ。

或る若い婦人記者でその記者の仕事はまだどれだけでも経験していない人が、帰り際に靴を履くために腰をかがめ、そして靴を履いてしまった小さな支度を終った眼で、ひとあたり庭先の水のあるところを眺めて言った。

「おさかなはどこにも、いないようですが。」

婦人記者は私の長い二百枚もある、その物語を読んでいたのである。

「あれは、とうに死にました。」

「そお、それはお可哀そうなことをしました。」

われわれはじかに生き物に親しんでいる間、われわれと心が其処に常住していることを疑わなかったために、屢々、その生き物に高度の愛情が蟠わだかまっていることに今さらに驚くことがあつた。私達のこの驚きはその生き物を喪つた時にはじめて領うなずける状態であつて、平常は何でもない普通の事に思われていた。つまり、われわれはたとえ対手がどういふ種類の生き物であつても、その生態としたしく一緒にこれを眺めて暮らしていたといふことから、他の生き物と比較にならない近親感があつて、他人から見て実にばかばかしい可愛がり方を見せているものだ、或る一人の婦人を愛するという状態の男を、外から見る時には想像の出来ないこまやかさがあつて、これにはただ、そうかなあ、こういう事もあるのだといふ

結論を出してその聖地から引き揚げる外はないのである。

「ひでえ風邪じゃねえか、それでよく春まで持ちこたえたものだ。」

小売商人の金魚屋の診察は、ただ、簡単にそういつただけであった。こんなの死んだら、また代りにどんな良いのでもいるから、お飼いになるなら電話を下されば直ぐ持つて参りますと彼はいい、さかなも、こんなに裏返しになって浮いて来たら、いくらわたくしでも手の付けようもございません、こいつは三年子でよく生きた方です、素人さんがお飼いになったとしても、これ以上は持ちこたえることが容易ではないのです。病気の直接の原因はいわば睡眠不足というやつで、夜にお廊下にお入れになった事はいいとしましても、障子越しの蛍光灯が夜おそくまで水の中に差しこんで、さかなは何時もうつらうつらとしか眠れなかったのが、死因といえは死因なんでしょうね、それに胃腸の方にもしこりがあつて固くなっています、こうなったらご覧のとおりに肌の色が先刻とは、ずっと朱の色を失つて来ていますから、とても助かりようもございませんと言って、彼は素気なくさつさと帰つて了つた。そして間もなく金魚は一塊の朱になり、それも次第に黄ろい濁りを鱗の間に融かして浮び上つて来た。

大抵、私は書きはじめると書き損じはしない方であったが、それは原稿という紙を引き

裂く鋭い音が何時も嫌いで、山を裂くように怖れたからだ。それが今日は殊更に頭に来て生き物の死に影響するような気がし、書き損じの原稿紙を四つに畳み、さらにそれを又四つに折つて雑誌の間に片づけて了つた。そして山を裂くような音響を封じたことが嬉しかった。

永い作家生活の中でも、ひよんな事から、妙にその作品が成功したとも成功しないとも限らないのに、頭にのこつて自分だけがそれを大切にあつかう作品が二三篇はあるものだ、それを書いていた日とか、うごかない動機とかが一綴りの原稿のまわりにまで溢れていて、それを書くことや整えることも出来ないもやもあるものだ、人間がつくる霧みたいなものなのだ、凡そ人間の事で書けない筈がないのに、そのもやもやは書き分けられないのである。書くのに破廉恥な事とか、きまりが悪く、あまつたるい事とか、文章には表現出来ない顔や性質とか、そういう種類の物が作家のまわりに霧や靄もやとなり、もやもやになつて何時も立ち罩こめている。それらは或る小説の或る機会にうまく融け合つてくれるもやもやなのである。このもやもやを沢山持ち其処から首を浮べて四顧している者が、作家という者だと言えそうである。

このもやもやは「蜜のあわれ」にまだ豊富にあることで、もう私は沢山という気がした。

そして当然ここでペンを擱くべき日の来たことを知り、それにすら名残りが留められたのである。作家の慾はふかく実力はあさい、あさい才能の中で何時もどたばたする自覚を失っていることでは、余計な作為が分不相応に自分の中に暴れ廻っていることも、冷やかに眺めて通り過ぎる者も作者なのである。作家というものの五体のところどころには不死身の箇処があつて、幾ら年月が経つても死なない部分だけが、色を変えずにつやつやと生きている。それがどのように狭小な部体であつても、深度があり記憶は素晴らしい、へどもどして行き詰まるとそこを敲きさえすれば、扉はひとりで開き、中の物が見え聴える音は聴え、たすけを呼ばなくともたすけて呉れるのである。この痣のような瘡に似た不死身の一処をさすりながら、彼は生き彼は書き、ありもしない才華へのあこがれに悶えている残酷さである。

この解説のようなものを書き終えた晩、何年か前に見た映画「赤い風船」を思い出して、それを書きこむことを忘れないように心覚えをしてその晩は寝たが、翌朝になってすっかり忘れてしまい、まる二日間思い出せなかつた。今朝になって漸と「赤い風船」の面白さを思い当てた。この映画のすじはわすれたが、貧しい一人の少年が坂上の人家の窓先から

一個の風船を見つけ、それを失敬して持って逃げるのが物語の発端で、少年の往くところ風船がついて廻り、風船のあるところ町を往く少年のすがたがあった。最後に風船は悪少年共によつて野外で踏み潰されるが、併し別の風船が突然数十球のつながりになって、町じゅうの少年等の持つ風船を集めて、碧藍へきらんの空に舞い上つて往くという物語であつたが、総天然色の風船群が逆光の中にあざやかに空高く、高層の建物と次第にはなれてゆく美しい光景で、この映画は先の少年の嬉しさを取り戻して終りを告げていた。この「赤い風船」を見た後に、こういう美しい小事件が小説に書けないものか知ら、何とかしてこんな一篇の生ける幼い愛情が原稿の上に現わせないものかと、一カ月くらい映画「赤い風船」に取り附かれ、ばかはばかなり、伶俐ぶつた考えを持つとうとしていたが、悪小説家の悪癖は日を趁うて「赤い風船」の聖地から離れて往つた。そして日々の忙殺は「赤い風船」の喜びもまた私の頭からあと形もなく飛散して了つたのである。

だが、私はついに「赤い風船」を今日思い当てて、いつぞや、こういう物が書きたい願いを持つていたが、お前が知らずに書いた「蜜のあわれ」は偶然にお前の赤い風船ではなかつたか、まるで意図するところし、さ些かもないのに、お前はお前らしい赤い風船を廻して歩いていてではないか、お前だつて作家の端くれなら、或る日或る時にひよんな事から感奮

して見た映画の手ほどきが、別の形でこんな物語を書かせていたではないか、一旦書いて見たいという考えを作家が持つということは、作家と名のつく人間にはいつかは仕事の上に、何等の覚性もなく、ひとりでにこんがりと、色つやをおびて現われて来る機会があるのではないか、そしてその事が仕事が終わった時にやっぱり風船はとうに頭の奥ふかくに取りついていたことが判るのだ。心が覚えをこめていたということは大したことなのだ。そして私は愛すべき映画「蜜のあわれ」の監督をいま終えたばかりなのである。漸く印刷の上の映画というものに永年惹きつけられていたが、いま、それを実際に指揮を完うし観客の拍手を遠くに耳に入れようとしているのである。

私は会話とか対話で物語を終始したことは、小説として今度が初めての試みであつて、一さいの野心も計画も持たなかつた。最初三四枚すらすらと書き上げ、それを心に反芻はんすうしているあいだに自然にこんな情景は、この形で踏むことが面白いという教えを自分自身の中から受け、また自然である気がして進行したのであるが、危あぶなげ気は百枚くらいに達して感じたものの、勢いとなめらかさは遂に説話体になり、それがたとえ失敗に終つても生涯に一度くらい失敗したつてよいという度胸を決めて了つたのである。私自身が些すこしでも気持よく書き分けられ、美しいものが作り上げられたら、それでよいという考えをもちや

捨てることをしなかつたのだ。昔は親を殺したり主人をあやめたりする人間の名前の上に、悪という洗けがれた文字をのつけて、その悪を死歿の後の刺冠しかんとしていた。悪七兵衛君、悪源太君もみなそういう武人であつた。しかし女では悪・君子とか、悪・八重子なぞという刺冠の名前はない、悪小説家、悪作家という者がいたら、私なぞ悪文のかんむりは疾とうにつけられているし、私自身も悪作家といわれた方がはるかに他の美名を貰うより潔い、だからこそ、この物語の穉ちぎ氣を自ら好むのである。そしてこれが悪作ならいよいよ悪作家と名付けられるべきである。煮ても焼いてもくえない悪作家という者は、見渡したところ何処にもいそうもない、そこに一人前に坐りこむのも小氣味好い話である。

今日この原稿を綴とじて終り、ふと毎月「新潮」の竹山道雄氏の手帖を読む例にならつて、愛読の眼を凝らしてゆくと、「大宇宙の中で、われわれの生命は、（さながら大きな闇の中に弧をえがいて飛んでいく一つの火花のようなものだといったら、いちばん当っている。）」という数行に出で会わして、この原稿の最初に書いた私の二三行そっくりなのに、ひそかに驚いた。私は何時もこの遠くで消滅する光芒が絶えずキラめいていることを感じ、竹山道雄氏のそれもこの火花にカチ当てられたのである。偶然ではあるが、話のよく合う人と話をした数瞬を感じた。何十万年来の人間の爪跡を尋ねている竹山氏の文献も、そして

たわいない私の文章の往くところも、一つの不死身の火を感じたことでは、同じ思いが邂^{いこ}逅^うしたのである。

青空文庫情報

底本：「蜜のあわれ・われはうたえども やぶれかぶれ」講談社文芸文庫、講談社

1993（平成5）年5月10日第1刷発行

底本の親本：「室生犀星全集 第十一巻」新潮社

1965（昭和40）年1月10日発行

初出：「新潮」

1959（昭和34）年1月～4月

※「二、おばさま達」の初出時の表題は「おばさま」です。

※「四、いくつもある橋」の初出時の表題は「橋」です。

入力：日根敏晶

校正：江村秀之

2017年6月25日作成

2019年12月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蜜のあわれ

室生犀星

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>